

〈調査論文〉

本願寺の系譜

—歴代宗主の事績と聖教—

富島 信海

【要旨】

浄土真宗本願寺派の本山である本願寺（西本願寺）は、宗祖親鸞聖人を開山とし、750年以上もの歴史を積み重ねてきた。その間、歴代宗主は25代を数える。本願寺や歴代宗主に関する研究は膨大な数が蓄積され、教義・教学、社会、政治、経済などとの関わりの中で論じられてきた。本調査論文は、そうした成果を踏まえ、歴代宗主の経歴を略述するとともに、聖教・本尊・影像等の制作や授与・普及の様子などから、本願寺歴代宗主の果たした役割について概観したものである。

【凡例】

- ①本調査論文は、聖教・史資料の動向を鑑みて〈中世篇1〉〈中世編2〉〈中世編3〉〈近世篇1〉〈近世篇2〉〈近代・現代篇〉の5つに分けて構成した。各時代の初めには、時代情況、仏教・真宗の動静、聖教活動を略述し、歴代宗主の系譜を示した。各宗主については、原則として生没年、名前、家族、経歴、聖教・史資料、参考文献の順に示すことで、歴代宗主の事績と聖教を概観した。
- ②各事項については、玄智『大谷本願寺通紀』（真宗史料集成8所収）をはじめ、次のような通史的研究書等を適宜参照した。
 - 井上鋭夫『本願寺』（至文堂、1963）
 - 藤島達朗『本願寺物語—東本願寺の歴史』（真宗大谷派宗務所出版部、1984）
 - 名畑 崇『本願寺の歴史』（法蔵館、1987）
 - 福間光超『親鸞聖人と本願寺の歩み』（永田文昌堂、1998）
 - 『本願寺史』第1・2・3巻（浄土真宗本願寺派宗務所、1961・1968・1969）
 - 『本願寺年表』（浄土真宗本願寺派、1981）
 - 『増補改訂本願寺史』第1・2巻（本願寺出版社、2010・2015）
 また、各事項の《 》内には参考となる聖教・史資料等を示した。聖教・史資料については、聖教は『浄土真宗聖典全書』、史資料は『真宗史料集成』『大系真宗史料』『本願寺史料集成』などに翻刻されているものを、併せて参照されたい。
- ③年月日は、原則として旧暦年に対応する西暦を括弧内に示し、改元年は改元後の元号を用いた。なお、親鸞聖人の生没年は新暦に基づいて表記した。

〈中世篇 1〉 真宗聖教の形成

■ 鎌倉時代

平安時代末期から鎌倉時代にかけては、貴族中心の社会から武家が台頭していく過渡期にあたり、源平の争乱を経て鎌倉幕府が創始された。建久 10 年（1199）初代将軍源頼朝が亡くなると幕府体制に動揺があった。承久 3 年（1221）幕府と後鳥羽上皇らに対立した承久の乱が起こったが、上皇方が敗北した。その結果、幕府の西国支配権が進展し、北条氏による執権政治体制が強化された。北条時頼は得宗専制化を進めたが、文永 6 年（1269）・弘安 4 年（1281）の 2 度の蒙古襲来（元寇）があった。御家人は窮乏し、流通経済や貨幣経済の発展もあって、永仁 5 年（1297）には「永仁の徳政令」が出された。13 世紀中頃からは、荘園公領支配に対抗する悪党行動が頻発するようになり、幕府の支配体制が崩れつつあった。

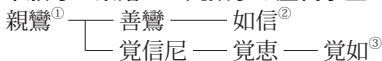
■ 仏教・真宗 — 末法の到来と鎌倉仏教 —

摂関政治の時代、末法思想と相俟って浄土信仰が民衆の間にも広まり、次第に定着していった。鎌倉時代に入っても、仏教界では依然として南都諸宗や天台宗、真言宗の勢力が強かったが、易行による民衆救済を標榜する仏教が登場した。最初に現れたのが浄土宗の源空（法然）聖人であり、臨済宗の栄西、曹洞宗の道元、日蓮宗の日蓮、時宗の一遍などが続いた。親鸞聖人もその中の一人に数えられる。こうした新たな仏教の動きに対し、旧仏教側でも、法相宗の貞慶や華嚴宗の高弁、律宗の叡尊や忍性が出て改革の運動をおこした。研究史上では鎌倉新仏教、顕密体制論など、様々な見方がある。

■ 聖教 — 真宗典籍群の形成 —

浄土真宗の宗祖親鸞聖人は、多数の典籍を制作するとともに、その基盤となる経論章疏の書写を盛んに行った。第 3 代宗主覚如上人やその子存覚上人も、多くの著作を残して浄土真宗の要義を明らかにしている。それらは、浄土真宗の聖教・史資料の中核に位置づけられ、浄土真宗の教義・教学の根幹となっている。

■ 本願寺の系譜 ※丸数字は歴代宗主



覚如上人は、法脈による〈法然—親鸞—如信〉の三代伝持と、血脈による〈覚信尼—覚恵—覚如〉の廟堂留守職という、2 つの論理を主張し、親鸞聖人から覚如上人に至る系譜を明かし、本願寺の成立に至った。

宗祖 親鸞聖人

承安 3 ～弘長 2 年（1173-1263） 90 歳

童名：松若。名：範宴、綽空、善信。

（なお、明治 9 年〈1876〉「見真」の諡号が贈られた。）

■ 家族

父は皇太后宮大進などを務めた日野有範、母は吉光女（貴光女、源義親女）といわれ、兄弟に尋有、兼有、有意、行兼がいる。妻は三善為則（為教）の娘恵信尼である（九条兼実の娘玉日姫を正妻とする説もある）。子に範意（印信）、小黑女房（昌姫）、善鸞（慈信房）、明信（栗沢信蓮房）、有房（益方入道、道性）、高野禪尼（嵯

峨)、覚信尼がいる《伝絵・日野一流系図》。

■経歴 一立教開宗一

自身の著作や御消息のほか、『恵信尼消息』、『親鸞聖人伝絵』（伝絵）などによって、その経歴が知られる。覚如上人『報恩講私記』・『拾遺古徳伝絵詞』、存覚上人『嘆徳文』、従覚上人『慕帰絵』や乗専『最須敬重絵詞』にもその遺徳が記されている。

誕生・幼少期 真筆本の『尊号真像銘文』（正嘉本）に「正嘉二歳戊午六月廿八日書之 愚禿親鸞 八十六歳」（聖典全 2-655）とあるように、承安3年（1173）の誕生、日付は5月21日（旧暦では4月1日）とされる《伝絵・絵伝撮要》。京都日野の地に生まれた。

出家学道 養和元年（1181）9歳の春、伯父日野範綱に導かれ、青蓮院の慈鎮和尚（慈円）のもとで得度し、範宴少納言公と称した。以後20年間、比叡山で修学したとされる《伝絵》。『恵信尼消息』第3通には、「殿のひへのやまにだうそうつとめておはしましける」（聖典全 2-1034）とあり、堂僧を勤めていたと考えられる。

六角夢想・吉水入室 建仁元年（1201）29歳の時、比叡山を下りて六角堂に参籠した。95日目の暁に救世観音（聖徳太子）の夢告を受け《伝絵》、法然聖人のもとを100日訪ねて入室し《恵信尼消息》、念仏による浄土往生の教えを聞き、専修念仏に帰依した。元久2年（1205）法然聖人より『選択本願念仏集』の見写を許され、法然聖人真筆で内題と標宗の文、「釈綽空」の名字とが記された。真影図画も許可され、その銘に法然聖人真筆で六字名号と「若我成仏十方衆生」等の『往生礼讃』文が記された。また、夢告により字を改めて名字を記された《教行信証後序》。この頃の伝記として、『伝絵』には、信行両座・信心諍論などがある。なお、恵信尼とはこの頃に結婚したとみられている（越後とする説もある）。

建永（承元）の法難 建永元年（1206）興福寺の告訴によって念仏弾圧が激しくなり、承元元年（1207）念仏停止の宣旨が下された。法然聖人は土佐（実際は讃岐）へ、親鸞聖人は藤井善信の名を受けて越後国府へ配流された《教行信証後序・歎異抄流罪記録》。聖人は自らを「非僧非俗」と位置づけ、愚禿を姓とした。

関東 建暦元年（1211）赦免されたが、京都には戻らず、妻子とともに関東に移住した。常陸国稲田の草庵を拠点とした。『顕浄土真実教行証文類』（教行信証）「化身土巻」では元仁元年（1224）を仏滅年代算定の基点としている。この年、同書の執筆を開始したと考えられ、後に立教開宗の年とされている。寛喜3年（1231）三部経読誦の発願・中止を反省したといわれ《恵信尼消息》、『伝絵』には弁円浄度や一切経校合《仏光寺蔵本》など、関東時代の伝説や逸話が収録されている。

帰洛 嘉禎元年（1235）63歳頃に帰洛したと考えられている。帰洛後は、『教行信証』（坂東本）の推敲を重ねるとともに、「三帖和讃」をはじめ多くの著述や御消息を制作した。関東では法義理解の混乱が生じ、息男慈信房善鸞を遣わしたが、かえって異義が生じたため、建長8年（1256）善鸞を義絶した。『伝絵』には、帰洛時の箱根霊告、帰洛後の蓮位夢想・入西鑑察・熊野霊告が収められている。

門弟 親鸞聖人の門弟については、御消息や聖教などによって知られ、下野・高田門徒（真仏・顕智）、武蔵・荒木門徒（源海）、下総・横曾根門徒（性信）、常陸・鹿島門徒（順信）、三河・和田門徒（信寂）、奥州・大綱門徒（如信上人）などがいた。『親鸞聖人門侶交名牒』（交名牒）では、48名が直接教えを受けた「面授」の弟子として記されている。帰洛後は、尊蓮・尋有・兼有・蓮位などが親鸞聖人の近くにいた。

示寂 京都では五条西洞院に住したとされる。弘長2年11月28日(1263年1月16日)、弟尋有の坊舎(善法坊)で覚信尼、益方入道や顕智らに看取られて生涯を終えた。翌29日東山西麓の延仁寺にて火葬、翌30日東山鳥辺野の北、大谷に遺骨が納められた。大谷の墓所は文永9年(1272)冬に吉水北辺に改葬され、堂を建てて影像が安置された《恵信尼消息・伝絵・存覚袖日記》。この大谷廟堂は覚信尼と親鸞聖人門弟らによる設立であり、門弟の共有物という性格であったとされる《大谷廟堂関連文書》。

■ 聖教・史資料

主著『教行信証』を始め、漢語聖教・和語聖教・御消息等を多数著したが、撰述のほとんどが60歳以降のものである。経典等の書写、名号・銘文等の染筆なども盛んに行い、真筆が多く残されている。親鸞聖人の真蹟については、『増補親鸞聖人真蹟集成』(法蔵館、2005-2007)などに原典が復刻され、著作や書写聖教などについては、『浄土真宗聖典全書』第2巻「宗祖篇上」(本願寺出版社、2011)や第3巻「宗祖篇下」(2016年度刊行予定)などの翻刻がある。

真蹟 親鸞聖人の筆跡のうち年代が明確なものは80歳代が多いが、60歳代では『唯信鈔』平仮名本とその紙背の『見聞集』は親鸞聖人63歳の筆を伝えるものとして筆跡の判定基準とされている。

元久元年(1204)比叡山の圧力に対して法然聖人が提出した「七箇条制誡」(京都府二尊院蔵)に「僧綽空」と自筆で署名した。50歳代以前の真蹟には、『観無量寿経註』・『阿弥陀経註』・『信微上人御釈』・『烏龍山師并屠兒宝蔵伝』・『道綽禪師略伝』(いずれも本願寺蔵)がある。60歳頃から執筆を始めたと考えられる『教行信証』坂東本(真宗大谷派蔵)は、晩年に到るまで改訂が繰り返された。70歳代以降は、和語聖教が多く、宝治2年(1248)『浄土和讃』・『浄土高僧和讃』(一部真筆、専修寺蔵)、建長7年(1255)『浄土三経往生文類』(略本、本願寺蔵)・『尊号真像銘文』(建長本、法雲寺旧蔵)、正嘉元年(1257)『一念多念文意』(真宗大谷派蔵、奥書は康元2年)、『唯信鈔文意』(専修寺蔵康元二年正月二十七日日本、専修寺蔵正月十一日本)、正嘉2年(1258)『正像末和讃』(専修寺蔵)・『尊号真像銘文』(正嘉本、専修寺蔵)、真筆消息12通などがある。その他、法然聖人の法語の輯録として康元元~2年(1256-57)書写校合の『西方指南抄』(専修寺蔵)がある。さらに、当時の刊本に訓点等を加えた『往生論註』(本願寺蔵)、『善導大師五部九卷』(専修寺蔵)の加點本が伝わる。

聖教の書写も多く行い、『経釈要文』(二尊大悲本懐、真宗大谷派蔵)、『大般涅槃経要文』(専修寺蔵)、『見聞集』(般舟讚文・涅槃経など、専修寺蔵)、「浄肉文」(専修寺蔵、老年期)、「曇摩伽菩薩文」(専修寺蔵)、「須弥四域経文」(専修寺蔵、老年期)、「浄土本縁経文」(専修寺蔵、80歳以前か)、「三骨一廟文」(石川県専光寺蔵)、「数名目・十悪」(専修寺蔵)、「震旦国十四代」(専修寺蔵、老年期)などがある。また、聖覚や隆寛の書を多く書写しており、聖覚『唯信鈔』(専修寺蔵信証本、西本願寺本、専修寺蔵嘉禎元年<1235>平仮名本<頭註は文暦2年>)、その他断簡)などが真筆として伝わっている。なお、近年では、平成4年(1992)に「道綽禪師略伝」(本願寺蔵)、平成22年(2010)に「四十八願文」拔書(大谷大学蔵、康永元年<1256>筆)、平成24年(2012)に「皇太子聖徳奉讃」断簡(本願寺維持財団蔵)などの真蹟が発見されている。

その他撰述 書写本の奥書等から知られる撰述に、漢語の『浄土文類聚鈔』（建長4年〈1252〉・建長7年〈1255〉）・『愚禿鈔』（建長7年〈1255〉）・『入出二門偈頌』（建長8年〈1256〉以前か）、和讃の『皇太子聖徳奉讃』（建長7年〈1255〉）・『大日本国粟散王聖徳太子奉讃』（康元2年〈1257〉）、和語の『浄土三経往生文類』（略本、康元2年〈1257〉）・『如来二種回向文』（康元元年〈1256〉）・『弥陀如来名号徳』（建長7～文応元年〈1255-1260〉）、聖徳太子伝を集成した『上宮大師御記』（正嘉元年〈1257〉）などがある。真仏や顕智による書写本が多く残されている。

消息・語録 真筆消息12通、古写消息6通が伝わり、後に『親鸞聖人御消息集』・『未灯鈔』・『御消息集』（善性本）・『親鸞聖人血脈文集』・『五卷書』など集成本が制作された。なお、消息によれば、書写した聖教は関東の門弟に送られていたようで、『親鸞聖人御消息集』第6通には「たゞ詮ずるところは、『唯信鈔』・『後世物語』・『自力他力』、この御文どもをよくよくつねにみて、その御こゝろにたがへずおはしますべし」（聖典全2-828）などと、聖覚や隆寛の書の拝読を勧めている。また、親鸞聖人の法語・語録も聖教として編纂されており、『歎異抄』は河和田唯円によってまとめられたものとされる。

本尊・影像 親鸞聖人の名号本尊は、専修寺・本願寺・愛知県妙源寺に十字名号4幅、八字名号1幅、六字名号1幅の計7幅が伝えられており、80～84歳の制作である。現存する影像には、次のようなものがある。「鏡御影」（本願寺蔵・現讃銘覚如上人）は、専阿弥陀仏の筆とされ、親鸞聖人の相貌が繊細に描かれている。「安城御影」（本願寺蔵・讃銘親鸞聖人）は、親鸞聖人83歳の頃の姿を描いたもので、専信房専海による『教行信証』書写との関連が推測されている。『存覚上人袖日記』（聖典全4「相伝篇上」所収）に存覚上人披見の詳細な記録があり、蓮如上人が模本二幅（副本）を作成し、実如上人の頃、本願寺に寄贈された。真宗大谷派にも「安城御影」の別本が伝えられている。「熊皮御影」（奈良国立博物館蔵）は南北朝時代の制作で、『善信聖人絵』（琳阿本）の画工・康楽寺浄賀によって描かれたとされる。

【参考文献】

辻善之助『親鸞聖人筆跡之研究』（金港堂書籍株式会社、1920）、中澤見明『史上の親鸞』（文献書院、1922）、宮崎圓遵『親鸞聖人書誌』（真宗典籍刊行会、1943）、服部之総『親鸞ノート』（国土社、1948）、『同』続（福村書店、1950）、笠原一男『親鸞と東国農民』（山川出版社、1957）、『親鸞聖人行実』（真宗大谷派宗務所出版部、1960）、赤松俊秀『親鸞』（吉川弘文館、1961）、宮崎圓遵・藤島達朗・平松令三『親鸞』（徳間書店、1973）、古田武彦『親鸞思想—その史料批判』（富山房、1975）、重見一行『教行信証の研究—その文献学的考察』（法蔵館、1981）、平松令三『親鸞真蹟の研究』（法蔵館、1988）、『親鸞大系』思想篇13巻・歴史篇11巻・別巻（法蔵館、1998-1999）、平松令三『親鸞』（吉川弘文館、1998）、松尾剛次『知られざる親鸞』（平凡社新書、2012）、今井雅晴『親鸞と浄土真宗』（吉川弘文館、2013）、平雅行『歴史のなかに見る親鸞』（法蔵館、2011）、末木文美土『親鸞—主上臣下、法に背く』（ミネルヴァ書房、2016）

第2代宗主 如信上人

嘉禎元～正安2年（1235-1300） 66歳

■ 家族

慈信房善鸞の子で親鸞聖人の孫。子には有宗、如円、浄如、女子、如慶、範昭の6名。

■経歴 — 「面授」の弟子として覚恵・覚如両上人に相伝—

親鸞聖人面授の弟子である《交名牒》。覚如上人『口伝鈔』・『改邪鈔』、従覚上人『慕婦絵』、乗専『最須敬重絵詞』に覚如上人らとの交流が示されている。

誕生・幼少期 嘉禎元年（1235）親鸞聖人63歳の時に誕生した《本願寺蔵如信上人寿像裏書》、『大谷本願寺通紀』などは延応元年（1239）とする。幼少期より祖父親鸞聖人の膝下で法義を受けたとされ《最須敬重絵詞1》、『口伝鈔』冒頭には「本願寺鸞聖人、如信上人に對しましめて、おりおりの御物語の条々」（聖典全4-245）、『改邪鈔』奥書には「右此抄者、祖師本願寺聖人、面授口決于先師大綱如信法師之正旨、報土得生之最要也」（聖典全4-327）とある。

東国 20歳代の頃、関東に移住したとされる（移住の時期については諸説あり）。『最須敬重絵詞』第6巻には「如信上人は奥州大綱東山といふ所に居をしめ給ける」（聖典全4-458）、『交名牒』には「奥州大綱住」（史料集成1-1019）とある。奥州大綱で願入寺を創立し、大綱門徒を形成した。如信上人門下には覚恵上人・乗善・入善・明教・性信・覚如上人らがいる。

覚恵・覚如上人との交流 文永9年（1272）大谷廟堂が建立された。文永11年（1274）小野宮禅念より覚信尼へ大谷北地が譲られ、建治3年（1277）覚信尼は大谷敷地を親鸞聖人の墓所として門弟中へ寄進した。如信上人は御正忌の折に奥州より上洛し、御正忌法要を親修したとされる。『口伝鈔』奥書には「元弘第一之曆美仲冬下旬之候、相当 祖師聖人靈報恩謝徳之七日七夜勤行中、談話先師上人釈如信 面授口決之専心・専修・別発願之次…」（聖典全4-285）、『慕婦絵』第3巻には「弘安十年春秋十八といふ十一月なかの九日の夜、東山の如信上人と申し賢哲にあひて釈迦・弥陀の教行を面授し、他力撰生の信証を口伝す。所謂血脈は叡山黒谷源空聖人、本願寺の親鸞聖人二代の嫡資なり」（聖典全4-381）、『最須敬重絵詞』第1巻には、「この上人の弟子またそのかずあり、東国には数輩にをよぶ。處々の道場をのをの化益をいたす。京都には一人の尊宿まします、勘解由小路中納言法印坊宗昭これなり」（聖典全4-433）とあり、『最須敬重詞指図書』（本願寺蔵）には、失われた第4巻の第13段に「如信上人対面之所」とあったとされる。如信上人は弘安10年（1287）11月19日の夜、18歳の覚如上人に宗義を伝授し、その後、報恩講親修のために上京した時にも宗義を伝授されたようである。正応3年（1290）大谷での報恩講に上洛したが、同年覚恵上人・覚如上人の東国巡拝の際にも接見した。『大谷本願寺通紀』には「弘安三年十月、覚信尼以レ師為レ法嗣、属大谷寺務時師年四十二、既而師以レ從兄弟覚慧、為レ留守」（史料集成8-353）などとする。

示寂 正安元年（1299）常陸国金沢で布教中に急病にかかり、翌正安2年（1300）1月4日、66歳で示寂した。その最期は乗善が看取ったようである《本願寺蔵如信上人寿像裏書・最須敬重絵詞6》。覚如上人により百ヶ日、1周忌（京都）、3回忌（京都）、13回忌（金沢）、33回忌（大綱）の法要が勤められた。

■聖教・史資料

建治3年（1277）覚信尼に「びわ女預状」（本願寺蔵）を記しているが、これが如信上人唯一の自筆文書である。『親鸞聖人本伝和讃』の作者ともいわれている。

本尊・影像 正応4年（1291）に覚如上人が制作した寿像が本願寺に伝えられ、元亨3年（1323）覚如上人が、応安7年（文中3、1374）善如上人が修復している。

【参考文献】

今井雅晴『如信上人』（真宗大谷派東京教務所、1995）、坂東性純ほか『親鸞面授のらびと一如信・性信を中心として』（自照社出版、1999）、今井雅晴『親鸞と如信』（自照社出版、2008）、福原亮巖・松本巧晴編著『親鸞聖人本伝和讃の研究』（呉竹山大原野寺・清重山尊重寺、2011）

第3代宗主 覚如上人

文永7～観応2年（1270-1351） 82歳

童名：光仙。諱：宗昭。号：毫撰。

■ 家族

覚信尼の孫で、親鸞聖人の曾孫覚恵上人の長男。母は周防守権中原氏という。子に存覚上人、従覚上人、女子がいる。

■ 経歴 一廟堂の寺院化と本願寺教団の確立一

覚如上人の経歴は、示寂後すぐに制作された従覚上人『慕帰絵』、乗専『最須敬重絵詞』のほか、『常楽台主老衲一期記』（存覚一期記）などによって知られる。

誕生・幼少期 文永7年（1270）12月28日、京都三条富小路に誕生した。親鸞聖人示寂後8年にあたる。幼年期は澄海・宗澄・浄珍・信昭・覚昭・行寛に付き、内典・外典を学んだ。はじめ慈信房澄海より『俱舍論頌疏』、敬日房撰述の『初心集』5巻など内外の典籍について学び、ついで宗澄から天台、行寛から唯識を学んだ。弘安9年（1286）10月20日、得度受戒の式を行い、覚如房宗昭と称した。また広橋中納言兼仲の猶子となり、勝解由小路中納言法印と号した。

法義の継承 弘安10年（1287）如信上人より宗要を授かった。『最須敬重絵詞』巻1には「この上人の弟子またそのかずあり、東国には数輩にをよぶ。處々の道場をのの化益をいたす。京都には一人の尊宿まします、勘解由小路中納言法印坊宗昭これなり。当流伝来の譜系をば今師よりうけ、親鸞聖人の遺跡をば先考よりつたへたまへり」（聖典全4-433）とある。正応元年（1288）冬、親鸞聖人面授の弟子である河和田の唯円が上洛し、法文の疑義について談じている《慕帰絵3》。正応3年（1290）父覚恵上人とともに東国の親鸞聖人遺跡を巡拝した。

諸宗の勉強 南都では聖道門の教義、大谷で真宗の教義を学んだが、その傍ら東山安養寺の阿日房彰空に『観経疏』を学び、慈光寺にて幸西の一念義を聴いた。慈信房澄海の実弟良海より敬日房門海及び澄海の秘書類を貰い受けて長楽寺流にも通曉した。さらに東山清水坂光明寺の自性房了然について三論宗の要義を学んだという。

唯善事件と留守職就任 永仁4年（1296）大谷南地が買得されたが、その後唯善と覚恵上人の対立が露わになり、正安3年（1301）大谷廟堂と敷地の管領権をめぐる争いが生じた。乾元元年（1302）覚如上人は覚恵上人より留守職の譲状（本願寺蔵）を受けたが、徳治元年（1306）上洛した唯善が廟堂の鍵を奪い、大谷退去を余儀なくされた。翌年、覚恵上人は二条衣服寺で示寂した。覚如上人は鹿島門徒順性、高田門徒顕智、和田門徒信寂らの支持を得て唯善と対峙し、延慶元年（1308）青蓮院や本所の妙香院の裁決により、覚如上人が勝訴した。しかし、延慶2年（1309）唯善によって廟堂が破壊され、唯善は宗祖影像や遺骨を奪取し関東へ逃亡した。覚如上人は関東安積の法智などの協力により、翌年堂舎を再興した。延慶3年（1310）門徒たちの信認を得て、覚如上人は留守職に就任した《存覚一期記》。

「専修寺」額と「本願寺」号 正和元年（1312）法智の発起により「専修寺」の寺額が掲げられたが、延暦寺の抗議で撤去された《存覚一期記》。その後、元亨元年（1321）「本願寺親鸞上人門弟等愁申状」に「本願寺」の寺号が初見され、元弘元年（元徳3、1331）撰述の『執持鈔』には「本願寺聖人」（聖典全4-233）と記すなど、「本願寺」を公称するようになった。

存覚上人義絶 元亨2年（1322）長子存覚上人との不和が絶えず、義絶に至った。この義絶は延元3年（暦応2、1339）には解かれた。興国3年（康永元、1342）再び義絶を申し渡し、覚如上人示寂前年の正平5（観応元、1350）に解かれた。

廟堂の焼失と再建 元弘3年（正慶2、1333）洛西川島村に久遠寺を創建した。建武3年（延元元、1336）廟堂が焼失したため、西山久遠寺に居住した。暦応元年（延元3、1338）専空・寂静の尽力により、他所から房舎を36貫で購入して移築した。このとき方形堂舎になったと考えられ、阿弥陀如来木像を安置しようとしたが、専空らの反対で成らなかった《存覚一期記》。なお、『改邪鈔』には親鸞聖人依用の本尊について「天親論主の礼拝門の論文、「帰命尽十方无导光如来」をもて真宗の御本尊とあがめましましき」（聖典全4-302）としている。覚如上人の晩年から善如上人にかけて、宗祖影像の横に阿弥陀如来像を安置していたようである。**示寂と後継** 正平6年（観応2、1351）1月19日、82歳で示寂した。23日延仁寺にて火葬、24日遺骨が拾われ、久遠寺に墳墓が築かれた。覚如上人の葬送については『存覚一期記』や『存覚袖日記』に詳しい。覚如上人は留守職の相伝等に関する置文を3通残している。留守職後継者として内室善照尼、次男従覚上人、従覚上人の長男光養丸（善如上人）の順で指名していたが、覚如上人に先立って善照尼が亡くなり、従覚上人も辞退したので、善如上人が後継となった。覚如上人は「留守職相伝系図」を制作して〈覚信尼－覚恵－覚如〉の系譜を明らかにし、覚信尼の子孫が留守職を相承すべきことを示している。

■ 聖教・史資料

『伝絵』や『口伝鈔』などの覚如上人の著作は、『浄土真宗聖典全書』第4巻「相伝篇上」に収録されている。自筆には、『善信聖人絵』（琳阿本、本願寺蔵）・『善信聖人親鸞伝絵』（高田本、専修寺蔵）・『本願寺聖人親鸞伝絵』（康永本、真宗大谷派蔵）・『口伝鈔』（龍谷大学蔵）などがある。

撰述 宗祖33回忌を機縁として永仁2年（1294）『報恩講私記』を制作し、報恩講の形式を整えた。永仁3年（1295）『善信聖人絵』（本願寺蔵、琳阿本）、『善信聖人親鸞伝絵』（専修寺蔵、高田本）を制作、正安3年（1301）『拾遺古徳伝絵詞』を著している。これらの伝絵類では、親鸞聖人や法然聖人の遺徳を讃えるとともに、浄土門流における親鸞聖人や大谷廟堂の位置を明らかにした。50～60歳代には『執持鈔』、『口伝鈔』、『本願鈔』、『改邪鈔』、『願願抄』を著し、〈善導－法然－親鸞〉の三祖同轍を述べるとともに、〈法然－親鸞－如信〉による三代伝持の血脈を強調し、覚如上人自身がその継承者であることを述べ、さらに本願寺を公称して廟堂の寺院化を図った。70歳代には『最要鈔』、『尊師和讃鈔』、『出世元意』（法華念仏同体異名事）を著したほか、『本願寺聖人親鸞伝絵』（康永本）を重修している。また、『教行信証大意』の撰者を覚如上人とする説もある。覚如上人の著作では、信を往生決定の正因とし、信後の称名を仏恩報謝の行とする信心正因・称名報恩の教義が確立され、これが今日の本願寺教学の基礎となっている。

書写 『愚禿鈔』、『浄土文類聚鈔』、『上宮大師御記』、『皇太子聖徳奉讃』、『自力他力事』、『大日本粟散王聖徳太子奉讃』、『経釈要文』（二尊大悲本懐）などの書写が伝えられている。

和歌 『慕帰絵』や『最須敬重絵詞』には、存覚上人・従覚上人・善如上人などと各地に詣でて詠んだ和歌が多数収録され、正和4年（1315）自詠の和歌1000首を収録した『閑窓集』2帖を伏見上皇に献じたことが両書に示されている。示寂2日前には次のような和歌を2首残している。

南無阿弥陀仏 仏力ならぬ のりぞなき たもつ心も われとおこらず
八十地あまり をくりむかへて 此春の 花にさきだつ 身ぞ哀なる

（『慕帰絵』6・聖典全4-418、『最須敬重絵詞』7・聖典全4-475）

本尊・影像 『執持鈔』に見られる三祖同轍は、「善導・法然・親鸞三祖立像」（真宗重宝聚英8、No.52）、『口伝鈔』や『改邪鈔』に示された三代伝持は「親鸞・如信・覚如連坐像」（真宗重宝聚英8、No.69）のように凶像化も凶られたと考えられる。

その他 『恵信尼消息』の披見、『浄土文類聚鈔』の校合が伝えられている。延慶元年（1310）「鏡御影」を修復し、応長元年（1311）存覚上人の講義により越前大町如道に『教行信証』を伝授したが、このとき持参されたのが文永12年（1275）に書写されたと推定されている西本願寺本『教行信証』と考えられる。

【参考文献】

佐竹智応『本願寺第三世覚如上人略伝』（顕道書院、1902）、稲葉円成『覚如上人之研究』（無尽灯社、1917）、梅原真隆『覚如上人の伝統』（顕真学苑出版部、1931）、重松明久『覚如』（吉川弘文館、1964）、宇野円空編『覚如上人』（国書刊行会、1987）、龍谷大学善本叢書11『口伝鈔・改邪鈔』（同朋舎出版、1992）、新保哲『親鸞 覚如 才市』（晃洋書房、1992）、千葉乗隆著作集1『親鸞・覚如・蓮如』（法蔵館、2001）

〈附〉 存覚上人・従覚上人とその聖教

覚如上人の子である存覚上人と従覚上人は、重要な聖教の制作や書写を盛んに行った。真宗聖教形成に大きな役割を果たしたので、ここに附記しておく。

■ **存覚上人** 正応3～応安6年（1290-1373）84歳
名：親綱、興親、親恵。諱：光玄。

存覚上人は正応3年（1290）覚如上人の長男として誕生した。幼少期は東北院慶海・心性院経恵・尊勝院玄智などに師事した。唯善事件後に本願寺に戻り、覚如上人を補佐していた。『存覚一期記』正和3（1310）年条によれば、大谷の管領を譲られたともされるが、覚如上人による2度の義絶があった。善如上人が依頼して制作した『浄典目録』は、真宗において初めて成立した聖教目録であり、親鸞聖人や覚如上人の著作をはじめ、次のような存覚上人の著作が記されている。

『持名鈔』、『浄土真要鈔』、『弁述名体鈔』、『破邪顕正鈔』、『諸神本懐集』、『女人往生聞書』、『顕名鈔』、『歩船鈔』、『決智鈔』、『報恩記』、『選択註解鈔』、『纒解記』、『謝恩講式』、『嘆徳文』、『信貴鎮守講式』、『浄典目録』、『法華問答』、『存覚法語』、『六要鈔』

これらは、仏光寺了源などの要請によって制作されたもので、真宗聖教において重要な位置を占めていった。『浄土真宗聖典全書』第4巻「相伝篇上」には、『浄土真要鈔』・『持名鈔』などの聖教や、その生涯を編年体で記した『存覚上人一期記』、

本尊・影像類などを書き留めた『存覚上人袖日記』などが収録されている。自筆としては、『存覚上人袖日記』（京都府常楽寺蔵）があり、『教行信証』元亨本・『愚禿鈔』（京都府常楽寺蔵）・『観阿弥陀経集註』（専修寺蔵）などの書写本が伝わる。

【参考文献】

谷下一夢『存覚上人一期記の研究並解説』（真宗学研究所、1943）、龍谷大学善本叢書3『存覚上人一期記・存覚上人袖日記』（同朋舎出版、1982）、林智康『存覚教学の研究』（永田文昌堂、2015）

■ **從覚上人** 永仁3～正平15年（延文5）（1294-1360）67歳

童名：光珠丸。名：光真、光楯、光尋。諱：慈俊。

永仁3年（1294）覚如上人の次男として誕生、日野俊光の猶子となった。応長元年（1311）17歳で得度、頼禅の弟子となり、左衛門督・大納言と仮称し、永寛親王・青蓮院慈道親王の門に入った。この年、『皇太子聖徳奉讃』を書写したと伝えられている。元弘3年（正慶2、1333）親鸞聖人の書簡22首を年時の校勘を行って2巻に集成した『未灯鈔』を制作した。興国4年（康永2、1343）覚如上人口述の『最要鈔』を筆記している。『大谷本願寺通紀』巻5（史料集成8-424）によれば、存覚上人義絶後の2年に渡って寺務を執ったとされる。覚如上人示寂直後の正平6年（観応2、1351）乗専の要請に応じて『慕帰絵』を制作した。覚如上人示寂後は子善如上人を補佐していたが、正平15年（延文5、1360）に示寂した。享徳4年（1455）蓮如上人による文書「開山已来代々」には覚如上人の次に「從覚御往生 延文五 九十六年 六十六才」として世代に入れ、康応元年（元中6、1389）の綽如上人讓状にも歴代として数えられている。歴代宗主の影像である山科八幅にも絵像があり、『本願寺作法之次第』第46条（聖典全5-980）でも歴代に数えていると考えられるが、『蓮如上人遺徳記』（聖典全5-1279）は蓮如上人を第8代としており、実如上人の頃に世代から外れたようである。

〈中世篇2〉 聖教の書写と伝授

■ **鎌倉時代末期、南北朝時代、室町時代前期・中期**

鎌倉幕府の体制が揺らぐ中、皇位継承や荘園相統をめぐる持明院統と大覚寺統の対立が激化した。後醍醐天皇が即位すると倒幕計画を進め、元弘3年（正慶2、1333）足利尊氏らによって鎌倉幕府は滅亡した。これを機に建武の新政となったが、後醍醐天皇は足利尊氏と対立。吉野へ逃れて北朝の光明天皇と南朝の後醍醐天皇が並び立つ南北朝時代に入り、尊氏は室町幕府を開いた。なお、覚如上人示寂時は、尊氏が弟直義を討った観応の擾乱（1350-1351）の最中であった。元中9年（明德3、1392）3代將軍足利義満によって南北朝が合体した。義満は明との勘合貿易を推進し、北山文化が花開いた。6代將軍足利義教は専制体制を強め、永享11年（1439）関東公方足利持氏を滅ぼしたが（永享の乱）、嘉吉元年（1441）義教が暗殺されて（嘉吉の乱）以降は、有力守護大名による合議政治の傾向が強まった。

■ **仏教・真宗 一仏光寺の盛行と本願寺一**

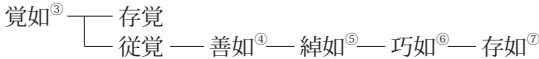
関東・荒木門徒系統の了源が京都に進出し仏光寺を建立した。その頃の大谷本願寺は「さびさび」していたとされ、沈滞時代と評価する向きもあった。伝記・旧記等が無いことが、この評価の一因でもあるが、綽如上人の越前・越中、存如上人の近江・

越前の巡錫などは、教団発展の基礎を築いた点で功績が大きい。なお『蓮如上人一語記（実悟旧記）』第158条には、「善如上人・綽如上人両御代のこと、前住上人仰られ候き。両御代は威義を本に御沙汰候し由仰られ候。然ば今に御入候由仰られ候き。黄袈裟・黄衣にて候」（聖典全5-728）とあり、行儀重視の傾向も見られた。

■ 聖教 — 聖教の書写と伝授 —

善如上人の頃には、真宗聖教の中心となる親鸞聖人・覚如上人・存覚上人の著作が出揃い、真宗最初の聖教目録である『浄典目録』が制作された。綽如上人・巧如上人・存如上人は、本願寺の書写聖教や本尊・影像等を多く門弟に授与した。本願寺特有の聖教が形成され、伝授・教化が行われた時代と位置づけられる。

■ 本願寺の系譜 ※丸数字は歴代宗主



讓状を数通認めて後継者を定めた。本願寺所有の聖教を書写し、奥書を記してこれを証した上で聖教等を授与することに、宗主としての役割が見られる。

第4代宗主 善如上人

正慶2（元弘3）～康応元（元中6）年（1333-1389） 57歳

童名：光養丸。諱：俊玄。号：伯耆守宗康、大納言。

■ 家族

従覚上人の長男。『日野一流系図』には日野俊光の猶子とあるが、俊光は嘉暦元年（1326）没。弟光長丸は正平5年（観応元、1350）13歳で示寂。子に綽如上人がいる。

■ 経歴 — 宗政と能筆 —

『慕婦絵』に2箇所登場しており、4首の和歌が残されている。『存覚一期記』にその動静が見え、顕誓『反故裏書』や実悟『蓮如上人一語記（実悟旧記）』などにもその経歴が記されている。

誕生から継職 元弘3年（正慶2、1333）2月2日に誕生。青蓮院にて修学した。祖父覚如上人から寵愛され、正平3年（貞和4、1348）にはともに丹後を遊歴した。正平5年（観応元、1350）覚如上人の後継者として讓状を受け、翌正平6年（観応2、1351）覚如上人が示寂すると継職した。時に19歳であったため、従覚上人や存覚上人の後見・補佐を受けた。弘和元年（永徳元、1381）正月2日には存覚上人によって常楽台に招待されており、以後毎年の恒例となった《存覚一期記》。

勅願寺 善如上人の頃、勅願寺になったと考えられる。正平12年（延文2、1357）には従覚上人宛と思われる、本願寺を勅願寺とする論旨があったと伝えられている《柳原家記録》。蓮如上人の『御文章』（文明13年〈1481〉）には「そもそも当寺のことはかたじけなくも亀山院・伏見院両御代より勅願所の宣をかうぶりて他にことなる在所なり」（聖典全5-402、御文章集成123）、『反故裏書』には「今本願寺御建立は文永年中亀山院の御在位也。即亀山・伏見院両御代より勅願所の宣旨を蒙れり」（聖典全5-1211）とある。

宗祖遠忌・堂舎整備 正平16年（康安元、1361）宗祖100回忌を修した。弘和元年（永徳元、1381）御影堂修復のために、募化疏を門下に頒つたと伝えられている。善如上人の時代に両堂形式となったともされる。

示寂 天授元年（永和元、1375）子綽如上人へ讓状を記し、元中6年（康応元、

1389) 2月29日、57歳で示寂し、大谷祖隴の側に葬られた。

■聖教・史資料

能筆 実悟『日野一流系図』に「能書」とあるように、能筆家として知られている。弘願本『親鸞聖人伝絵』（真宗大谷派蔵）は覚如上人存命中の書写とされ、同じく弘願本『法然聖人絵』詞書も善如上人筆ではないかと考えられている。また、『教行信証』延書17帖（本願寺蔵）は、近江伊香の成信に授与するために正平15（延文5、1360）に書写されたものである。

存覚上人への依頼 正平14年（延文4、1359）報恩講で用いるために存覚上人に『嘆徳文』制作を依頼し、正平21（貞治5、1366）に再治された。宗祖100回忌にあたる正平16年（康安元、1361）、存覚上人に『浄典目録』の制作を依頼し、翌年浄土教典籍を一統に標した同書が成立した。真宗法要所収本奥書によれば、天授5年（康暦元、1379）『存覚法語』を書写している。

第5代宗主 綽如上人

正平5（観応元）～明德4年（1350-1393）44歳
童名：光徳。諱：時芸。号：中納言、堯雲、周円上人。

■家族

善如上人の子で、日野時光の猶子となった。子に女子、巧如上人、頓円（鸞芸）、周覚（玄真）がいる。

■経歴 一北陸教化の足場を築く一

善如上人の頃と同じく威儀が重んじられた。『反故裏書』には「諸家より学匠文者のむね崇敬せしかば、勤行威儀をむねとし給と也」（聖典全5-1214）とある。

誕生から継職 正平5年（観応元、1350）3月15日に誕生し、日野時光の猶子となって中納言と仮称した。天授元年（永和元、1375）善如上人の譲状をうけた。善如上人52歳、綽如上人35歳の元中元年（至徳元、1384）に当時9歳の第2子光太磨（巧如上人）に譲状を与えており、この頃までに継職していたと考えられる。この譲状には「遠遠之境」におもむくとの文言がみえ、北陸に赴いたようである。また、「行学」についても言及しており、宗主に求められる資質が示されている。元中6年（康応元、1389）善如上人が示寂したが、同年には病弱での身あることを理由に、巧如上人に2度目の譲状を記した。

北陸教化 永和年間（1375-1378頃）、越中野尻の杉谷慶善と知遇を得て、一字を建立していたが、元中7年（明德元、1390）越中井波に瑞泉寺を創建し、ここを拠点に北陸教化に従事した。同寺には「沙門堯雲」と署名のある勸進帳が残されている。綽如上人は瑞泉寺創建と関連して、宏才博識であったと伝えられている。中国より朝廷にもたらされた書状に判読できない箇所があったが、諸書の僧に読解できる者がいなかった。そこに綽如上人を推挙する者が現れ、越中から上洛した。上人はその文意を明らかとし、返書も記した。その功により周円上人の号が下賜され、砺波に一字を建立することが許可された。綽如上人が砺波に向かったところ、霊泉が湧き出て、瑞泉寺の寺号を賜って勸願寺となり、砺波を井波と改めたとされる。

御堂衆・鎰取役 本願寺の体制整備にも尽力した。『本願寺作法之次第』第2条「綽如上人御時御戸役之事」には「綽如上人御時より、御堂衆に下間名字の人をなされ、鎰取と申て、開山聖人の御厨子の役人にて候つる由候。御戸は御住持御役なれば如

此由候」（聖典全 5-970）とあり、同記事が『山科御坊事并其時代事』第 10 条「鑑取の事」（聖典全 5-935）にも記されている。経論聖教に携わり、法文の是非邪正を沙汰する者を御堂衆として下間氏（蓮位の末裔）の 6 人がこれにあたった。また、祖龕の開閉を司る者を鑑取役として下間氏の 1 人を任じた。なお、寺の雑務には都維那を置いたともされている。

示寂 明徳 4 年（1393）4 月 22 日に巧如上人へ 3 度目の譲状を書き、同 24 日、44 歳で示寂した。大谷祖隴の側に葬られた《本願寺系図・明翰抄》。

■ 聖教・史資料

書写・相伝 天授 6 年（康暦 2、1380）『口伝鈔』に奥書を加えた《富山県勝満寺蔵》。元中 9 年（明徳 3、1392）錦織寺慈観（存覚上人第 7 子綱厳）より『六要鈔』を相伝された《本願寺蔵奥書》。

本尊・影像 岐阜県安養寺に方便法身尊像、福井県正明寺に宗祖影像が授与された《裏書》。

嵯峨本阿弥陀経 『本願寺作法之次第』第 63 条「本堂漢音経事、同百返念仏事」には「本堂の阿弥陀経は、嵯峨本とて弥陀経のすり本候、漢音を付たる本にて候。綽如上人あそばされたる弥陀経本披見候つるにも、嵯峨本のごとく御付候て、如此嵯峨本のごとく毎朝すべし、奥書にあそばしをかれ候き」（聖典全 5-984）とある。

【参考文献】

『綽如上人伝』（550 回御遠忌御法要記念、越中真宗史編纂会、1943）、『荒川興行寺史—北陸宗教団における綽如一周覚系の展開』（興行寺門信徒会、1976）

第 6 代宗主 巧如上人

天授 2（永和 2）～永享 12 年（1376-1440） 65 歳
童名：光太麿、光多賀麿。諱：玄康。号：大納言、証定閣。

■ 家族

綽如上人の第 2 子。子に存如上人、空覚（光崇）、見秀尼、如乗（宣祐）がいる。

■ 経歴 —北陸教化に尽力—

誕生・継職 天授 2 年（永和 2、1376）4 月 6 日に誕生、日野資康の猶子となり、大納言と仮称した。明徳 4 年（1393）綽如上人示寂後、18 歳で継職した。

北陸教化 父綽如上人に続いて北陸地方の教化にあたり、瑞泉寺にもしばしば滞在したとされる。越前荒川の門徒中へは弟周覚を派遣し、華蔵閣（興行寺）が成立。弟頓円は越前藤島超勝寺を建立、第 4 子如乗は瑞泉寺の住持となった。越前では浄一らが秘事を唱えたとされ、永享 8 年（1436）に異義として擯斥した。

示寂 永享 8 年（1436）3 月 28 日、存如上人に譲状を書いていたが、永享 12 年（1440）10 月 14 日、65 歳で示寂した。墓所は大谷祖隴の側とされる。

■ 聖教・史資料

巧如上人の住持は 47 年に及んだが、後半生は存如上人・常楽寺空覚・蓮如上人の協力を得て、畿内・北陸の門弟に聖教の書写・授与の教化活動を行った。

浄興寺への授与 巧如上人の頃、本願寺より信濃長沼浄興寺に多くの聖教が授与されている。応永 8 年（1401）『教行信証』延書（大阪府妙琳坊蔵）、応永 34 年（1427）『口伝鈔』、応永年中の『教行信証』、永享 2 年（1430）『執持鈔』・『改邪鈔』が伝えられている。

絵伝・本尊 『親鸞聖人絵伝』四幅裏書（石川県願成寺蔵）、大和国十津川の長瀬鍛冶屋道場に下付した方便法身尊形などが伝えられている。

【参考文献】

八尋慈薫編輯『巧如湛如両上人芳蹟』（本願寺新報社出版部、1940）

第7代宗主 存如上人

応永3～長禄元年（1396-1457）62歳

名：光某（下の字不明）。諱：円兼。号：中納言。

■ 家族

巧如上人の長男。広橋兼宣の猶子。妻は如円尼。子に蓮如上人、如祐尼、見瑞尼、如勝尼、応玄、蓮康、俊如尼がいる。

■ 経歴 一両堂整備と地方教化一

誕生・継職 応永3年（1396）7月10日に誕生、広橋兼宣の猶子となり、仮名を中納言と称した。応永25年（1418）本弘寺大進と近江堅田法住との手次争いの際、父巧如上人に代わって裁断したとされる。巧如上人の存命中から寺務を執っていたと考えられるが、永享8年（1436）40歳の時に巧如上人の譲状を受け、永享12年（1440）巧如上人が示寂し、継職した。

両堂整備 永享10年（1438）御堂や坊舎などの整備を進めた《真宗大谷派蔵・浄興寺蔵消息》。阿弥陀堂建立については、消息や実悟『蓮如上人仰条々』第194条にその事情が記されている。『本願寺作法之次第』第31条によれば、阿弥陀堂は三間四面、御影堂は五間四面であった。大谷廟堂に「本願寺」号が掲げられて以降、堂内には宗祖影像に並んで阿弥陀仏像が安置されていたと考えられるが、ここに御影堂・阿弥陀堂が並立する両堂形式が実現した。

地方教化 純如上人以来の北陸教化、とくに加賀・越前の教化をさらに進め、次代以降に本願寺教団が発展する礎を築いた。かつて加賀の荻生福田に赴いたとされ、応永26年（1419）仏乘に『親鸞聖人伝絵』4幅が授与されていた。存如上人の頃には本誓寺、専光寺、本泉寺が成立している。越前では、石田に西光寺を建立、永存（純如上人の孫）を住持とし、自身も2年間当寺にて教化にあたった。弟如乗は越中瑞泉寺の住持となった。飛騨・下総などにも本尊や影像を授与している。近江では、堅田法住が本願寺に帰依した《本福寺由来記》。

示寂 長禄元年（1457）6月18日、62歳で示寂した。墓所は大谷祖隴の側とされる。長子兼寿（蓮如上人）が相続した。

■ 聖教・史資料

『教行信証』から「正信偈」を抄出して、「三帖和讃」を重視した。長男蓮如上人と協力し、数多くの聖教を書写して各地の門弟に授けている。

継職前 信濃浄興寺性順への写与が多く行われ、応永31年（1424）『安心決定鈔』本、応永32年（1425）『教化集』、『法華問答』が授与された。その他、『伝絵』・『持名鈔』・『浄土真要鈔』・『安心決定鈔』末などが写与され、永享6年（1434）浄興寺周観に『愚禿鈔』書写を許可している。同時期には常楽寺空覚が『顕名鈔』・『決智鈔』・『浄土見聞集』・『諸神本懐集』を写与しており、本願寺による授与と考えられる。その他、永享8年（1436）能登本誓寺へ宗祖御影を授与、永享9年（1437）加賀専光寺へ『三帖和讃』を授与、永享10年（1438）『諸神本懐集』を書写《真

宗法要所収本奥書、永享11年(1439)加賀専光寺へ『持名鈔』・『教化集』を授与している。親鸞聖人の著作のほか、存覚上人の著作を多く書写しており、また蓮如上人が重宝した『安心決定鈔』を書写している。

在職時 宝徳元年(1449)『正信偈』(本願寺蔵)、康正元年(1455)『阿弥陀経』断簡(石川県法性寺旧蔵)のほか、『破邪顕正鈔』(龍谷大学蔵)、『三帖和讃』(本願寺蔵・真宗大谷派蔵)の書写が伝わる。在職時には蓮如上人の補佐を受けて聖教の写与にあたっている。永享10年(1438)には蓮如上人書写の『浄土真要鈔』に奥書・花押を加え、宝徳元年(1449)には専称寺真光に『親鸞聖人絵伝』4幅を授与しているが、それに先んじて蓮如上人が『御伝鈔』を授与している(富山県勝興寺蔵奥書)。『教化集』・『親鸞聖人御因縁秘伝鈔』のように、談義本の書写も行っている。浄興寺蔵4通、真宗大谷派蔵1通の消息は両堂整備の様子を伝えている。

本尊・影像 慈願寺には存如上人裏書の方便法身尊像が伝わる。嘉吉3年(1443)巧如上人御影(本派金沢別院蔵)を制作した。影像としては山科八幅の他、享徳3年(1454)本派金沢別院蔵影像がある。長享2年(1488)親鸞聖人・存如上人連坐像(蓮如上人裏書・大谷派金森懸所)、寛正2年(1461)聖徳太子・親鸞聖人・存如上人連坐像(蓮如上人奥書)など親鸞聖人等との連坐像が作成されている。

【参考文献】

『存如上人芳躰』(本派本願寺、1956)、宮崎圓遵「存如時代の本願寺」(『龍谷史壇』30、1949、宮崎圓遵著作集4に収録)

〈中世篇3〉『御文章』と『正信偈和讃』

■ 室町時代末期、戦国時代、安土桃山時代

正長元年(1428)正長の土一揆が発生した。正長2年(1429)播磨の土一揆や嘉吉の乱に伴って発生した嘉吉の土一揆など、各地に土一揆や徳政一揆が起こった。別の形態の一揆としては国一揆などがあり、守護大名権力に対抗する動きも見られた。戦国時代にかけては、各地に惣村が生まれ、浄土真宗とも結びついた。寛正元年(1460)には中世最大規模の飢饉(寛正の大飢饉)が発生し、社会状況も悪化していった。応仁元年(1467)から11年続いた応仁・文明の乱以降、全国に戦乱が広がることとなった。戦国時代後期になると各地の有力戦国大名が地域統合を進め、織田信長と豊臣秀吉の天下統一事業で戦乱の世は終焉を迎えた。

■ 仏教・真宗 ― 一向一揆 ―

本願寺の教線が大きく進展したが、各地の一揆は真宗門徒とも結びついて一向一揆となって展開した。本願寺は社会的勢力の一つとして認識され、戦乱に関与するようになった。文明末から長享2年(1488)加賀で本願寺門徒を主体とする一揆が起こり、守護富樫氏を攻め滅ぼして本願寺の領国となり、以後約100年「百姓の持ちたる国」といわれた。顕如上人の頃には、織田信長と対立して10年に及ぶ石山合戦が起こり、和睦後は鷲森へ退出し、貝塚、天満、京都へと移転した。

■ 聖教 ― 『御文章』と『正信偈和讃』 ―

蓮如上人による『御文章』作成と『正信偈和讃』の刊行は、真宗聖教史における一大画期である。蓮如上人以降は、『御文章』(五帖)の選定と証判本の授与、開版による伝道へと展開した。従来の聖教の書写と授与を主体とした本願寺の聖教と伝道

には吉崎の坊舎が火事に遭ったが、その頃から加賀において領主・在地武士などの争乱が絶えず、門徒の一部も関与していた。そうした中で文明7年(1475)吉崎を退去した。なお、長亨2年(1488)富樫政親の滅亡と共に、加賀は「百姓の持ちたる国」となり、能登や越前も本願寺の門末となった。

山科本願寺 吉崎退去後は、若狭小浜、丹波、摂津を経て河内出口御坊に移った。ここを拠点に畿内各地を伝道し、摂津富田御坊、和泉堺御坊にも滞在した。文明10年(1478)善従の勧めで山科に本願寺が再興されることとなった。文明12年(1480)御影堂が造営され、宗祖真影が安置された《御文章集成119》。文明13年(1480)阿弥陀堂が造作され、文明15年(1482)阿弥陀堂瓦葺きで諸堂が完成した。このとき4通の『御文章』が記されている。山科本願寺の規模等については、『蓮如上人仰条々』第194条や『山科御坊事并其時代事』第1条に記されている。なお、本願寺における能・狂言は、山科時代の文明13年(1481)存如上人25回忌後の演能が最古とされる《蓮如上人仰条々連々聞書82、蓮如上人御一期記95》。

本願寺勢力の拡大 文明14年(1481)に仏光寺の経豪が帰参し、多数の末寺もこれに従った。経豪は蓮教と改名し、興正寺を建てた。越前証誠寺の善鎮もこれに続き、明応2年(1493)錦織寺の勝恵が帰入した。また、大町の専修寺をはじめ、信濃、関東の諸寺も帰入するなどした。本願寺の教線は近畿地方を中心に、北陸、東北、東海、関東、中国、四国、九州に及んだ。

隠居 延徳元年(1489)寺務を実如上人に委ね、自ら信証院と号して(真宗における院号の起源)、御堂の南辺に隠居した。明応5年(1496)大坂御坊(石山)を建て、多くここに住した。これには門徒に授けた名号の礼金が充てられたという。

示寂と継職 明応7年(1498)発病し、明応8年(1499)病状が悪化した。山科に帰山し、3月25日、85歳で示寂した。遺体は遺言によって御影堂に安置された《空善聞書153》。翌日火葬、翌々日収骨された。収骨の後には参集の人々が灰や土まで掘りとりて国々に持ち帰ったとされる。火葬の跡に墳墓が築かれた。葬儀では蓮如上人の遺言によって正信偈・念仏和讃が用いられた(以後の浄土真宗の葬儀の源流)。

後継については、蓮如上人は譲状を3度記している。1度目は文正元年(1466)の順如上人に宛てた。『実悟記』によると、順如上人は本願寺の住持分として10年ほど蓮如上人を補佐していた。2度目応仁2年(1468)と3度目延徳2年(1490)は実如上人宛であり、実如上人が継職した。

なお、著名な門弟に、道西・龍玄・順誓・空善・法住・如光・道宗などがいる。

■聖教・史資料

『御文章』や『蓮如上人御一代記聞書』など、蓮如上人の著作や言行録は多く残されており、『浄土真宗聖典全書』第5巻「相伝篇下」に収録されている。

継職前 20歳頃より宗典の研鑽をし、勉学に専念していた。和語聖教の書写が多く、『教行信証』や『往生要集』の延書本も書写している。奥書等によって書写や所持が伝えられる聖教・史資料に、永享6年(1434)『浄土文類聚鈔』、永享8年(1436)『三帖和讃』、永享9年(1437)『三帖和讃』、永享10年(1438)『浄土真要鈔』・『口伝鈔』、永享11年(1439)『後世物語聞書』・『念仏往生要義抄』延書・『他力信心聞書』、嘉吉元年(1441)『浄土真要鈔』本、文安3年(1446)『愚禿鈔』・『浄土真要鈔』、文安4年(1447)『安心決定鈔』末・『末灯鈔』、文安5年(1448)『還

相廻向聞書』、文安6年(1449)『三帖和讃』・『安心決定鈔』・『女人往生聞書』・『御伝鈔』、宝徳2年(1450)『教行信証』・『御伝鈔』・享徳2年(1453)『三帖和讃』、享徳3年(1454)『往生要集』延書・『教行信証』延書、享徳4年(1455)『慕帰絵詞』、長禄元年(1457)『最要鈔』・『持名鈔』がある。『安心決定鈔』を重用していたことも窺える。

御文章・正信偈和讃 本願寺では朝夕の勤行に『礼讃』が用いられていたが、「正信偈」と「和讃」6首を依用するようになった《本願寺作法之次第 158》。文明5年(1473)『正信偈和讃』4帖を開版した。寛正2年(1461)以降多数制作された「御文章」は、総数が230通とも250通ともいわれ、自筆は63通伝えられている。吉崎時代以降、御文章の数が増加し、示寂前年の明応7年(1498)まで制作された。平易で簡潔な文章で浄土真宗の教えを記し、門徒が参集した席で読み聞かせたとされる。

正信偈の註釈 「正信偈」の内容を、存覚上人の『六要鈔』などから収集して漢文で註釈した『正信偈註』・『正信偈註釈』(本願寺蔵、自筆)を制作した。さらに寛正元年(1460)道西の所望により和文の『正信偈大意』を制作している。

所持(手沢)・書写 巧如上人時代に6~7、存如上人時代に18の書写あったが、継職後は22を数え、年次不明のものは24ある。その対象は、親鸞聖人・覚如上人・存覚上人などの聖教をはじめ、他門流・他宗派の著作にも及ぶ。長禄2年(1458)『三帖和讃』・『正信偈大意』・『六要鈔』、長禄4年(1460)『正信偈大意』、寛正2年(1461)『教行信証』延書・『嘆徳文』、寛正6年(1465)『一年二季彼岸事』、文正元年(1466)『教行信証』延書、文正2年(1467)『口伝鈔』中・下、応仁2年(1468)『報恩講私記』、文明2年(1470)『口伝鈔』上、文明9年(1477)『教行信証大意』・『御俗姓』・『浄土見聞集』、延徳元年(1489)『教行信証大意』・『教行信証』延書、明応3年(1496)『法然上人御詞』がある。

本尊・影像 蓮如上人以前の真宗では、書風・体裁も様々な名号本尊が用いられ、絵像を安置するものもあった。蓮如上人は、継職後の長禄4年(1460)と寛正元年(1461)十字名号、寛正2年(1462)親鸞聖人・蓮如上人連坐像、寛正5年(1466)宗祖影像をそれぞれ近江堅田法住に授与している。本尊については、「他流には、名号よりは絵像、絵像よりは木像といふなり。当流には、木像よりは絵像、絵像よりは名号といふなり」(聖典全5-547)と述べている。蓮如上人の用いた十字名号は近江などに「无导光本尊」として流行していたが、比叡山によって糾弾され、大谷は破却された(寛正の法難)。延徳4年(1495)には絵像本尊も授与している《驚森旧事記》。現存する名号の大部分は六字名号で、草書体で書かれている。

影像・寿像 宗祖200回忌にあたる寛正2年(1461)「安城御影」を修復し、文明12年(1480)模本を2幅作成した《本願寺蔵裏書》。『反故裏書』には「又右の御影、蓮如上人の御代めしのぼられ、二幅うつさせ給ひ、一本は山科の貴坊に御安置、一幅は富田教行寺にをかせられ侍り、正本は願正寺へかえしください給ふ」(聖典全5-1208)とある。この正本は永正15年(1515)実如上人時代に本願寺に寄進された。寛正2年(1461)親鸞聖人・蓮如上人連坐像が近江堅田の法住道場に授与され、文明元年(1469)蓮如上人寿像が良存へ《愛知県浄専寺蔵裏書》、文明11年(1479)に三朝浄土大師真影(七高僧像)、文明15年(1483)に法然聖人影像及び連坐像を信濃浄興寺へ授与している。なお、文明17年(1485)には覚如上人筆十字名号、『経釈要文』を修復した。

慕帰絵補完 文明13年(1481)将軍家に貸し出していた『慕帰絵』が飛鳥井中納言雅康によって返還された。第1・7巻が欠けていたため、翌年これを補っている。**紀行・和歌** 蓮如上人は各地に赴き、応仁2年(1468)高野・吉野紀行、文明15年(1483)有馬紀行、文明18年(1486)紀州紀行が伝えられる。多くの和歌を詠み、300首ほどが現存している。蓮如上人の和歌については、『浄土真宗聖典全書』第5巻「相伝篇下」所収の「蓮如上人和歌集成」を参照されたい。

言行録 実悟らによる多数の言行録が制作され、蓮如上人の行実を窺うことができる。『浄土真宗聖典全書』第5巻「相伝篇下」には、『蓮如上人御一代記聞書』のほか、『天正三年記』、『空善聞書』、『蓮如上人御物語次第』、『蓮如上人一語記(実悟日記)』、『拾塵記』、『蓮如上人仰条々連々聞書』、『蓮如上人御一期記』、『蓮如上人塵拾抄』、『山科御坊并其時代事』、『本願寺作法之次第』、『蓮如上人御自言』(栄玄聞書・蓮如上人御往生之奇瑞条々)、『蓮如上人御遺言』、『昔物語記』を収録している。蓮如上人の法語・言行録の成立・展開等については、『真宗史料集成』第2巻40頁解説を参照されたい。

寿像・絵伝 蓮如上人示寂後、毎年3月25日の命日は南殿に「蓮如六歳ノ時ノ御寿像」が掲げられるようになった《山科御坊御事并其時代事16・本願寺作法之次第76》。江戸時代には「蓮如上人絵伝」が制作され、その成立は大多数が寛政10年(1798)蓮如上人300回忌から明治31年(1898)400回忌にかけてであり、現存本数は71本とも108本ともされる。内容としては、「嫁おどしの鬼面」「本光房了願の殉教」などがある。

【参考文献】

稲葉昌丸『蓮如上人行実』(大谷大学出版部、1928)、稲葉昌丸『蓮如上人遺文』(法蔵館、1937)、龍谷大学編『蓮如上人研究』(本願寺宗政庁遠忌法要事務所、1948)、笠原一男『蓮如』(吉川弘文館、1963)、『蓮如上人行実』(真宗大谷派宗務所出版部、1994)、『蓮如大系』第1-5巻(法蔵館、1996)、『講座蓮如』第1-6巻(平凡社、1996-1998)、『蓮如上人研究』(永田文昌堂、1998)林智康『蓮如教学の研究』(永田文昌堂、1998)、『図録蓮如上人余芳』(本願寺出版社、1998)、北西弘『蓮如上人筆跡の研究』(春秋社、1999)

第9代宗主 実如上人

長禄2～大永5年(1458-1525) 68歳

童名：光養丸。諱：光兼。号：大納言。諡：教恩院。

■ 家族

蓮如上人の第8子(5男)。母は平氏とされる。妻は如祐尼。子に照如(光円)、実妙尼、円如上人、妙宗尼、実玄(兼珍)、実円(兼澄)、妙祐尼がいる。

■ 経歴 一西国・東国教団の組織化一

誕生・継職 長禄元年(1457)8月10日、父蓮如上人の継職翌年に誕生、日野勝光の猶子となった。応仁2年(1468)11歳で蓮如上人2度目の譲状を受け、後継として指名された。文明5年(1473)17歳で青蓮院にて得度、大納言と仮称した。すぐに本願寺に戻って実如を名乗った。文明15年(1483)蓮如上人の長男順如上人が示寂すると法嗣となり、蓮如上人が寺務を担い、実如上人は対外的な責任者となった。延徳元年(1489)蓮如上人が南殿へ隠居すると寺務を相続し、延徳2年(1490)蓮如上人3度目の譲状を受けた。蓮如上人は生前、兄弟中で協力すべ

きことを言い残していたが《空善聞書 170》、蓮如上人示寂後は実如上人・蓮綱・蓮誓・蓮淳・蓮悟が「賢息五人の御兄弟」として各地の寺院に住持して門徒を統括し、教団の確立につとめた《今古独語》。

錯乱・一揆 永正3年(1506)河内国錯乱で畠山尚順・義英と対立した細川政元に援助を求められた。北陸でも畠山義元・長尾能景と蓮悟が争った北陸一揆が起こり、本願寺が主導する初めての広域的な一揆となった。摂津・河内では、門徒の動員要請に対する反発として大坂一乱が起こり、実賢を新宗主に擁立しようと企てられた。この首謀者は討伐されたが、宗主の命によって戦闘に介入したはじめとなった。永正4年(1507)には細川政元が殺害され、京都で擾乱が起こった。実如上人は近江堅田に移って2年近く滞在、永正6年(1509)に山科本願寺に戻った。永正8年(1511)宗祖250回忌を勤めた《祖門旧事記》。こうした事態の中、永正後期には法制が整備されていった。永正15年(1518)北陸門徒に対して三箇条掟を定め、攻戦・防戦・具足懸や特定の武士を後援することを禁じ、年貢の滞納を誡めた《今古独語》。永正16年(1519)宗主家親族団の身分について一門一家制を定め、一族寺院の増加を禁ずる新坊建立停止令を発している《反故裏書》。越中・能登では、大永北陸一揆(1521-1523)が起こり、越中長尾勢と本泉寺蓮悟、加能越の一向衆、一部の飛騨勢の戦闘があった。大永3年(1523)には加賀門徒に再び三箇条の掟を厳制している。

朝廷 実如上人の頃、朝廷との関係が親密となった。永正11年(1514)尊鎮親王得度時に2000円進上し香袈裟を許可され、永正15年(1518)尊鎮親王受戒時に10000円進上し紫袈裟を許可された。大永元年(1521)後柏原天皇即位の礼に献金した功により青蓮院脇門跡に任ぜられ(本願寺禁官の嚆矢)、同年香衣を授与されている《門跡伝》。なお、後柏原天皇の頃から宸翰和歌を多数所蔵するようになり、円如上人示寂後に三条西実隆より『百日阿弥陀経』を授与されている。

年中行事 実如上人の頃、本願寺の年中行事が確立したとされる。斎頭役(宗祖忌)、御堂番役(宗教行事)、常住衆(法要行儀)、御堂衆(教義研鑽)、寺侍(下間氏、添状・奉書の発給、奏者)などを定め、寺務・法務の円滑な執行に努めた。

隠居・示寂 永正10年(1513)には次男円如上人も住持分となったとされる。実如上人は大坂御坊を隠居所とし、法物・証判御文章の授与は続けたが、対外的・世俗的交渉などは円如上人が担っていた。長男照如は明徳9年(1500)に22歳で示寂しており、円如上人も大永元年(1520)に32歳で示寂したため、後継は孫光養丸(証如上人)となった。大永5年(1525)に大病を患った実如上人は証如上人宛ての譲状を残し、2月2日、68歳で示寂した。7日に葬送が行われ、墳墓は山科に築かれた《実如上人闍維中陰録》。

■ 聖教・史資料

書写・相伝 『御俗姓』書写本10数点が現存している。明応期から大永期まで次々と授与され、識語に「于也文明九十一月初比、俄為^{たんに}報恩謝徳^を染^る翰記^{する}之者也」(聖典全5-203)とある。蓮如上人7回忌の永正2年(1505)蓮淳・蓮悟・如覚に『六要鈔』を学んだ。

御文章 実如上人証判御文章は1～30通を選んで卷子あるいは冊子化されたもので、800点以上伝存している。和歌山県浄国寺蔵本は蓮如上人示寂後半年目で最古の証判本である。新潟県高田本誓寺蔵本の元本は草稿御文集ともいわれており、

寛正2年(1461)から文明18年(1486)の年紀のある御文章111通を7分冊したものをも明応末から永正前期に書写したものである。富山県行徳寺蔵本、道宗所写本(冊子本2冊)からは文亀から永正前期には蓮如上人模本が作成されたことが窺え、名塩本御文集には異本・類本が散見されている。これは多数の『御文章』の中から特に肝要のものを80通選定し、5帖に分けたものであり、定本の策定が図られたと考えられている。永正前期には5分冊化されたが、永正中後期には訓読への配慮と蓮崇本の入手があって、永正末期には五帖本(帖内本)と帖外御文章の選定が行われた。大永期には、以前に倍する証判本の授与が行われている。なお、五帖本からさらに選出して一定にまとめたものは「御加御文章」「単帖本」などと呼ばれている。

名号・本尊 絵像本尊を中心に1300点が伝存している。多数の草書六字名号も伝えられ、その数は蓮如上人筆の数倍ともいわれる。御影類の授与は、奥羽・武蔵・下総・信濃・越後・摂津・豊前・豊後・薩摩・安芸・備後・讃岐・阿波など各地に及んだ。名号については、金泥十字名号や九字名号も伝えられている。

【参考文献】

大沼法龍・鷲尾教導『聖の跡—実如・寂如・本如の御事績』(龍谷会、1924)、堀大慈「本願寺歴代御消息年表—実如から広如まで—」(『史窓』29、1971)、同朋大学仏教文化研究所編『実如判五帖御文の研究』(法蔵館、2003)

第10代宗主 証如上人

永正13～天文23年(1516-1554) 39歳

童名：光仙、光養。諱：光教、諡：信受院。

■ 家族

実如上人の第3子円如上人(1491-1521)の長男。母は融誓尼(慶寿院)。妻は如從(増進院)。子に顕如上人、顕妙尼がいる。

■ 経歴 —大坂本願寺と教団組織体制の強化—

誕生から継職 永正13年(1516)11月20日に誕生した。大永元年(1521)6歳の時に父円如上人が示寂して法嗣となり、大永5年(1527)祖父実如上人が示寂したため、10歳で継職することとなった。大永7年(1527)青蓮院で尊鎮親王(後奈良天皇弟)を師として得度、九条尚経の猶子となった(摂家猶子の嚆矢)。実如上人の遺言により、一門衆による補佐で寺務が行われることとなったが、蓮悟・蓮慶・顕誓の3人は加賀に住していたため、蓮淳(蓮如上人6男)・実円・融誓尼の補佐をうけて宗政が執られた。

動乱 享禄以降、3つの動乱が起こった。享禄4年(1531)の享禄錯乱(大小一揆)では、超勝寺・本覚寺と加賀一門4ヶ寺(松岡寺・本泉寺・光教寺・願得寺)が対立した。天文元年(1532)以降、畿内諸方で争いが生じた。細川晴元の求めに応じ、畠山義宣・三好元長を攻めたが、晴元は本願寺門徒の勢力が伸張すると弾圧を図り、六角定頼と日蓮宗徒に攻められて山科本願寺が焼失したため、天文2年(1533)大坂の坊舎に寺基を移した《私心記》。それ以降、証如上人は和平の策をとったとされる。

大坂本願寺 蓮如・実如両上人の隠居所であった大坂本願寺は、実如上人の頃は実賢が住持であり、山科と同等の規模を備えていたとされる。証如上人が移って以降、

天文 11 年（1542）には阿弥陀堂が、翌年には御影堂の内陣が落成し、その後も諸堂の造作が続けられた《天文日記》。

戦国期の教団体制 戦国期の教団は人々の結集形態に次のような特徴がある。

本末的結集 本寺・末寺・道場からなる寺院群を束ねる。

直参身分 本山の直属成員の確定、年中行事への出仕し役を担う。

一門与力制 国郡を超えて広域的に結集する。近畿・北陸・東海に及ぶ。

また、証如上人の頃には、修正会及び彼岸会、本尊前の蠟燭、毎晨の歴代宗主像前の点灯が始められたという。

交流・文化 朝廷・公家・武家勢力・寺社勢力など各所との交流があった。実如上人の兄弟姉妹が多数の公家と婚姻関係しており、前代以来の教団の伸張もあって、朝廷との関係が深化した。天文 6 年（1537）には大僧都に任じられた。天文 7 年（1538）阿弥陀堂本尊左右に後奈良天皇寿牌・後柏原天皇位牌を安置している。天文 8 年（1539）伏見院宸筆の歌及び御盃、融誓尼へ『栄華物語』15 帖、尊鎮親王より『花鳥余情』、天文 9 年（1540）尊鎮親王が下向し後柏原天皇宸筆「古今」、毘沙門堂門跡より後奈良天皇宸筆『観経』、尊鎮親王より証如上人へ『愚問賢注』、融誓尼へ『伊勢物語』、天文 15 年（1546）青蓮院尊鎮親王より紫鰯袖無、天文 17 年（1548）後奈良天皇より尊円親王筆詩歌集 1 卷、天文 18 年（1549）『三十六人家集』が授与された。同年には歴代で初めて権僧正の勅許を受け、法要に尊鎮親王筆の紺紙金泥『阿弥陀経』1 卷を供した。また、九条家の猶子となったことから、本願寺と九条家との親密な交際が始まった。天文 5 年（1536）九条植通により大紋高麗縁などの使用許可があり、天文 9 年（1540）植通が製作した『本願寺系図』（本願寺蔵）が証如上人に贈られた。その他、天文 8 年（1539）清原業賢より『式条』、天文 9 年（1540）高倉永家らより歌学書『八雲御抄』が贈呈された。

また、戦国期には能の各座を保護するようになり、春日・金剛・金春の各大夫が歴代宗主の年忌法要や本山慶事（阿弥陀堂落慶・顕如上人誕生時）、親王の来訪時などに演能した。1 月 2 日に謡初が行われるようになった。茶の湯は、本願寺での初見は覚如上人の頃であり《慕婦絵》、吉崎御坊には茶所が設けられていたが《天正三年記》、証如上人の頃には、花見・報恩講・年頭、禁裏・青蓮院などの飲待時に行われた《天文日記》。天文 15・16 年（1546・47）頃に茶屋の記事が増加しており、茶湯隆盛とともに床飾り（掛・盆石）にも関心が向けられた。

示寂 天文 22 年（1553）から病に臥し、天文 23 年（1554）8 月 13 日、39 歳で示寂した《信受院葬送中陰事・反故裏書》。23 日に葬送が行われ、墳墓は山科に築かれた。

■ 聖教・史資料

御文章 天文 6 年（1537）頃、『御文章』5 帖 80 通をはじめて開版し《鷺森別院蔵》、以後の流布に大きな影響を与えた。父円如上人が 5 帖 80 通を選定していたが、これを上梓して巻末に自身の花押を附して門末に頒布した。

和讃 天文 20 年（1551）「和讃」の版木を作成させ、『正信偈和讃』が再版された。翌年、実従が「和讃」版木の字を訂正。天文 22 年（1553）「色紙和讃」が刷られている《私心記》。

書写 天文 5 年（1536）『法然上人行状絵図』を抄出した《本願寺蔵奥書》。

【参考文献】

北西弘「証如書状研究序説」(『大谷学報』63-3、1983)、草野顕之「戦国期本願寺教団における年中行事の意味」(『大谷学報』67-1、1987)、瓜生等勝「歴代宗主による『御文章』の刊行一開版前及び証如・顕如両宗主による開版・刊行」(『龍谷教学』25、1990)

第11代宗主 顕如上人

天文12～文禄元年(1543-1592) 50歳

諱：光佐。号：信楽院。

■ 家族

証如上人の長男で、母は如従尼。妻如春尼(教光院)は三条公頼娘(細川晴元・六角義賢の猶子で姉は武田信玄の妻)。子に教如上人、女子、顕尊、准如上人がいる。

■ 経歴 一石山合戦と京都移転一

誕生から継職 天文12年(1543)1月6日、大坂で誕生。天文23年(1554)8月12日本願寺にて証如上人のもとで得度、翌日証如上人が示寂したことにより、12歳で寺務を継ぎ宗主となった。融誓尼が後見的立場で補佐した。

門跡 永禄2年(1559)正親町天皇より門跡の勅許を受け、正僧正となった。門跡とは、出家した皇族や摂関家の子息などの寺院に与えられる称号であったが、顕如上人の場合は、父証如上人が九条家の猶子であったことから、摂家門跡に准ずるものであった。門跡成には、宗派としての公的認可と、朝廷・公家社会の秩序内への編入という意味も含まれ、本願寺内においては坊官(事務)を下間氏、院家(法務補助)を親族団に任せるなど、新たな秩序がもたらされた。永禄4年(1561)僧正、天正14年(1586)准后となったが、辞退している。

大遠忌と両堂再建 永禄4年(1561)3月18日より10昼夜にわたって宗祖300回忌が営まれた《今古独語・私心記》。具体的に遡れる初めての遠忌であり、大遠忌を3月に引き上げて行うのもこれが最初であった。法要は諸大寺に並ぶ格式が備えられ、法式には七条袈裟を着用された。永禄6年(1563)和泉・紀伊両国を巡教し、紀州雑賀の坊舎を鷺森に移した。永禄7年(1564)両堂が焼失した。翌年堂舎が再建され《龍谷大学蔵『永禄八年阿弥陀堂之御礎之記其他』》、報恩講が行われた。永禄12年(1569)正親町天皇の勅により次男興正寺顕尊が脇門跡となった。

一揆から石山合戦へ 永禄期には、各地で一揆が起こった。永禄5～7年(1562-64)三河で徳川家康と戦い、加越方面で圧力のあった上杉・朝倉氏に対して永禄8年(1565)武田信玄と盟約を結び《顕如文案》、毛利氏や浅井氏とも交友をもった。濃尾では織田信長により寺内が廃絶され、近江の坊主衆や門徒衆は六角氏と協調し、織田勢へ抵抗している状態であった。本願寺は、織田信長による矢銭5千貫の要求に応じたが、大坂本願寺の明け渡し要求を拒否したところ、破却すると返事を受け、元亀元年(1570)信長と交戦を開始、10年間に及ぶ石山合戦が始まった。伊勢長島一揆、越前一揆はいずれも鎮圧された。天正8年(1580)信長と和睦して、大坂退去となった。長男教如上人はしばらく残留したが、退去後は大坂本願寺と寺内町が焼失した。

京都移転 大坂退去後は紀州鷺森に移った《鷺森旧事記》。その頃の様子は宇野野水『鷺森日記』に天正10年(1582)以降の記述が残されている。天正11年(1583)

豊臣秀吉の要請により和泉貝塚願泉寺、天正 13 年（1585）大坂天満に移ったが《貝塚御座所日記》、天正 19 年（1591）京都七条坊門堀川に寺基を移転し《法流秘録・叢林集》、秀吉より大谷廟所に寺領一石の寄進があった《本願寺文書》。同年、絵所が設置された。文禄元年（1592）阿弥陀堂を新造、御影堂は天満から移築された。示寂 文禄元年（1592）11 月 24 日に示寂し、遺体は対面所に安置された《信楽院顕如上人往生記》。12 月 10 日七条東河原で火葬され、24 日に大谷祖隴の側に蔵された。寛文 2 年（1662）現地に改葬され、石碑が建てられた。後継については、顕如上人は天正 15 年（1587）阿茶（准如上人）へ譲状を記していた。

■ 聖教・史資料

引き続き証判本の授与を行い、木版『御文章』冊子本を作成した。なお教如上人については、天正 5 年（1577）頃から「新門」「新御門主」と称され、天正 8 年（1580）から天正 10 年（1582）までに絵像本尊、宗祖御影、歴代宗主御影や、証如上人御影を多数授与しており、慶長 4 年（1599）には『正信偈和讃』4 帖を刊行している。

【参考文献】

『顕如上人芳躅』（真宗本願寺派宗務所、1941）、谷下一夢『顕如上人伝』（真宗本願寺派宗務所、1941）、『図録顕如上人余芳』（浄土真宗本願寺派、1990）、千葉乗隆『顕如上人ものがたり』（本願寺出版社、1991）、『如春尼の生涯一本願寺第 11 代顕如宗主夫人』（晃洋書房、1991）、金龍静・木越祐馨編『顕如—信長も恐れた「本願寺」宗主の実像—』（宮帯出版社、2016）

〈附〉実悟・顕誓の聖教

実如上人から証如上人期にかけて、願得寺実悟や光教寺顕誓による聖教の書写・制作が盛んであった。ここに両者の聖教活動を附記しておく。

実悟は、永正 13 年（1516）慶聞坊龍玄から『教行信証』・『六要鈔』を伝授された。実賢からは蓮能尼書写『御文章』一帖を相伝している。享禄 2 年（1529）信濃浄興寺で親鸞聖人遺骨と存如上人書写『安心決定鈔』を相伝した《願得寺蔵》。実悟の主な著作は次の通りである。

『聖教目録聞書』、『日野一流系図』、『本願寺系図』重修、『下間系図』、『順興寺実従葬礼並中陰記』、『堺紀行』、『蓮如上人仰条々連々聞書』、『願成就院事并安芸蓮宗事』、『山科御坊事并其時代之事』、『実悟記』、『本願寺作法之次第』、『蓮如上人一期記』、『蓮如上人和歌縁起』

また、『安心決定鈔』（乗専本）、『拾遺古徳伝』（存覚上人本）校合、『蓮如上人後若年砌事』、『歎異抄』、『未灯鈔』、『御文章』、『持得鈔』等を書写している。

顕誓は、永禄 10 年（1567）『今古独語』に蓮如上人から顕如上人に至る事績を、永禄 11 年（1568）『反故裏書』に法然聖人以来顕如上人までの余事を著した。

【参考文献】

宮崎圓遵「願得寺実悟の生涯と業績」（『宗学院論叢』34、1976）、宮崎清「光教寺顕誓（兼順）の生涯」（『木村武夫先生喜寿記念 日本仏教史の研究』所収、1986）

天正 19 年（1591）15 歳で大阪天満本願寺にて得度、理光院（理門主）と称した。
東西分派 文禄元年（1592）顕如上人示寂後、教如新門跡（光寿）が嗣いだ。しかし翌年、如春尼と理光院の申し入れにより秀吉が吟味して准如上人継職の証状を出し、朝廷への奏状を経て、教如上人の退隱と准如上人の継職が決定した。一方、教如上人は慶長 7 年（1602）に東本願寺を創始し、東西に分立した。

堂舎の復興と宗祖大遠忌 文禄 3 年（1593）宗祖 333 回忌を修した。京都に寺基移転後初めての遠忌執行であり、祝能が催された。慶長元年（1596）の大地震で御影堂など諸堂が倒壊し、慶長 2 年（1597）御影堂を再建した。来たる宗祖 350 回忌に向けて、数年前より御影堂など諸堂の修理が行われ、慶長 16 年（1611）10 昼夜の大遠忌法要が修された。東坊が阿弥陀仏木像（春日作）を寄進し、定専坊が源空御影を寄進した。また、曼殊院良恕親王に相談し、天台の風を参考にして法事諸式を定めた。慶長 18 年（1613）御正忌前に祖像を濯洗する式（御行水）を創し、祖像所持の念珠の総糸を更える式を新たに始めた。

堂舎再復興 元和 3 年（1617）浴室より出火し、両堂・対面所等を焼失した。元和 4 年（1618）諸堂の再建及び移築等が行われ、准如上人自ら上宮太子御影を描き、徳力善宗に三国六高僧像を描かせ、本堂仏龕の左右に掛けられた。准如上人の時代には、白書院なども建てられている。

別院・本廟 慶長 8 年（1603）幕命により親鸞聖人廟地を延年寺山（東山五条坂）に移転した。慶長 10 年（1605）大阪津村、慶長 17 年（1612）和州畝傍、慶長 19 年（1614）和州御所、元和 7 年（1621）江戸浜町の別院を創立した。

交流・文化 文禄 3 年（1594）法眼、文禄 4 年（1595）法印・権僧正、慶長 9 年（1604）僧正、慶長 13 年（1608）大僧正となった。これ以降、本願寺住職が大僧正の綸旨を拝受するのが恒例となった。

准如上人は芸能に関心を見せ、有職故実や医学に詳しい山科言経に笙・笛などの楽を習った。正月の謡初が年中行事となったのも准如上人の頃とされ、現存最古の能舞台である北能舞台も建造された。和歌については、12 歳で歌会に出席し、慶長年間には連歌を詠んだとされる。

示寂 寛永 7 年（1630）病が重くなり、11 月の報恩講後、30 日夜に 54 歳で示寂した。遺体は対面所で絵像の前に安置された後、七条坊門で火葬、大谷に納骨され、寛文 2 年（1662）に現在の祖隴南脇に改葬された。慶長 13 年（1608）5 月 28 日長男阿茶丸へ讓状を書いていたが、阿茶丸は慶長 14 年（1609）に亡くなった。元和元年（1615）4 月 28 日に次男茶々丸（良如上人）へ讓状を書き、良如上人が継職した。

■ 聖教・史資料

校合・書写 慶長 2 年（1597）『愚禿鈔』（本願寺蔵）を加點校合した。慶長 6 年（1601）『真宗用意』（本願寺蔵）を書写・校合している。

刊行 慶長 7 年（1602）『浄土文類聚鈔』を刊行した《龍谷大学蔵》。

名号・影像 慶長 5 年（1600）六字名号数紙を親書し、六僧（金宝寺・浄照坊・本福寺・東坊・常性・教誓）及び下間家に授与した。元和 4 年（1618）上宮太子像を作成した。なお、寛永 5 年（1628）顕如上人御影の家紋を鶴丸（日野家）からハッ藤（九条家）へ描き改めた《法流秘録》。

消息・日記 法義を主とした消息として後の宗主御消息の源流となる御消息を書き

留めた「文案」が伝わる。また、准如上人自身が執筆した日記の抜粋とされるもの（龍谷大学蔵『慶長三年ヨリ同年マデ日記』など）も伝えられている。

【参考文献】

『准如上人芳蹟考』（准如上人三百回忌臨時法要事務所、1929）、伊藤義賢『准如上人苦難史』（中外出版、1929）、宮崎圓遵「准如上人と学問」（『龍谷史壇』21、1938）青木忠夫「本願寺准如筆「慶長期報恩講日記」」（同朋大学仏教文化研究所紀要 19、1999）、同 2（同朋大学仏教文化研究所紀要 20、2000）

第 13 代宗主 良如上人

慶長 17～寛文 2 年（1612-1662） 51 歳

童名：茶々丸。諱：光円。諡：教興院。

■ 家族

准如上人の第 7 子（次男）。母は寿光院准勝。寛永 2 年（1625）九条忠栄の娘通君（貞梁院如高、寛永 9 年〈1632〉没）と結婚、初めて撰家から妻を迎えた。寛永 17 年（1640）八条宮智仁親王の妹梅宮（珠香院如室、後水尾天皇の中宮・東福門院和子〈秀忠の娘〉の猶子、慶安元年〈1648〉没）と結婚。慶安 4 年（1651）40 歳で揚徳院寂照との間に房麿（寂如上人）が誕生した。子は 12 子で、女子（貞照院）、女子（赤良、早世）、男子（早世）、女子（良照尼）、女子（栄儀院）、女子（良空）、女子（真光院）、寂如上人、長麿（早世）、寂円（照尊）、女子（良俊）がいる。

■ 経歴 一近世教団体制の形成一

誕生・継職 慶長 17 年（1612）12 月 7 日に誕生した。元和 2 年（1616）准如上人の名代として門末の年賀を受けた《元和二年日次之記》。元和 5 年（1619）性応寺了尊（一家衆・御堂衆）による修学補導を受けた《常在京中由緒書》。寛永 3 年（1626）15 歳で得度《良如上人得度之次第・良如一代記》、すぐに新門跡として両堂に出仕した。寛永 7 年（1630）准如上人の示寂により 19 歳で継職し、翌年代替御礼のため江戸に向かった。

御影堂再建 元和の火災（1617）以来の取り組みであった御影堂の再建が成った。寛永 10 年（1633）御影堂再建の起工、寛永 12 年（1635）立柱し、翌年上棟した《御影堂棟上之記・寛永日記》。東西 24 間余・南北 31 間余・高さ 17 間、現在の御影堂がこれにあたる。この頃、対面所などの書院や飛雲閣、唐門などが整備された。

学寮と承応閲牆 寛永 15 年（1638）京都三条銀座の年寄・野村屋新兵衛宗句の寄附を得て茶所の西に学寮を創立した。寛永 16 年（1639）阿弥陀堂の北に講堂と所化寮が落成した《承応閲牆記》。寛永 17 年（1640）講義が始まり、能化准玄が『和讃』を講じた。正保 4 年（1647）西侍町に移転したが、准玄が歸寺し、小倉永照寺西吟が能化となった。承応元年（1652）興正寺南辺に移転した。承応 2 年（1653）西吟と同じく了尊を師とする熊本延寿寺月感が西吟の学説を批判し、3ヶ条の訴状を提出、聖浄二門の関係を中心として教学論争が繰り広げられた。良如上人が裁断したが、興正寺准秀は月感に与するなどしたため、『破安心相違覚書』を著した。明暦元年（1655）幕命により学寮は取り壊された。

別院・本廟 明暦 3 年（1657）江戸大火により浜町別院が類焼したため、築地別院を建てた。良如上人の頃には和州田原本、遠州浜松別院等が開基された。万治 3 年（1660）より大谷本廟修復にかかり、仏殿を移動、祖廟を南方に引移した。翌

年九条西光寺の造墓を許して以降、大谷での門末の造墓が始まり、以降 100 年あまりで約 8000 基に増加した。

宗祖 400 回忌 寛文元年（1661）再建された新しい御影堂で宗祖 400 回忌が勤修された。「御絵伝」を 4 幅から 8 幅に改め、絵表所の絵師徳力善雪に描かせた。寛文 2 年（1662）大地震が起り、仮殿を設営、両堂の尊像を避難させた。

交流 寛永 3 年（1626）法眼・大僧都、寛永 4 年（1627）僧正、寛永 15 年（1638）大僧正に任じられた。承応 3 年（1654）飛鳥井雅章が来山し『古今集』を閲覧している。その他、茶人金森宗和・片桐貞昌・八条宮智仁・智忠親王、曼殊院良尚親王・狩野探幽などと交流した。楽は、四辻家から伝授を受けている。

示寂 寛文 2 年（1662）8 月 27 日寂如上人に式文を授け、翌日宗祖典籍及び宗要を伝えた。9 月 7 日、51 歳で示寂した《承応閼牆記》。遺体は対面所に安置し、18 日に本山西郊で火葬・収骨された。大谷祖隴の側、准如聖人の南に納骨された。

■ 聖教・史資料

刊行 寛永 19 年（1642）『正信偈和讃』を重版した。寛永 20 年（1643）家臣に『和讃』購入並びに『御文章』装幀の費用を貸与した《秘史》。承応 2 年（1653）『御文章』の刊行を家臣西川新右衛門三直・高山内匠一友に許可している。

天海版大蔵經 慶安元年（1648）天海版大蔵經が到着した《法流秘録》。

教行信証刊本 寛永 13 年（1636）中野市右衛門による寛永版、正保 3 年（1646）中野是誰による正保版、明暦 3 年（1657）『教行信証』丁子屋九郎衛門による明暦版の『教行信証』が刊行され、後の蔵版化の基礎となった。

【参考文献】

宮崎圓遵「教興院良如宗主事蹟」（『龍谷大学論集』370、1962）、千葉乗隆「良如時代における教団機構の整備—真宗制度化教団成立史の一齣—」（『龍谷大学論集』370、1962）、『良如宗主—近世本願寺の礎を築いた宗主—龍谷大学大宮図書館二〇一一年度特別展観』（龍谷大学大宮図書館、2011）『良如宗主と龍谷大学の歩み—良如宗主 350 回忌法要記念企画展』（龍谷大学龍谷ミュージアム、2012）

第 14 代宗主 寂如上人

慶安 4～享保 10 年（1651-1725）75 歳

童名：房麿。諱：光常、興賢。諡：信解院。

■ 家族

良如上人の第 8 子（次男）。母は近江三井の人（揚徳院寂照）。寛文 7 年（1667）鷹司信房の息女幸（家光の妻の妹、貞淑院如瑞）と結婚した。長男と次男が早世したため、九条兼晴の子である保（住如上人）を猶子・嗣法とした。子は 21 子ともいわれ、湛如上人、静如上人らがいる。

■ 経歴 — 法制の整備 —

誕生・継職 慶安 4 年（1651）6 月 28 日に誕生した。寛文元年（1661）11 歳で得度し、九条兼晴の猶子となった。すぐに宗祖 400 回忌に出座し、速夜に式文を読誦した。寛文 2 年（1662）良如上人の示寂により、12 歳で継職した。同年、西吟について『選択集』の句誦を受けた。寛文 3 年（1663）江戸に赴いた。同年大地震が起り祖龕の扉が開いたため、宗祖御影を庭の仮殿に遷した。

法制 幕府は寛文 5 年（1665）諸宗法度を制定したが、これに対応するように、

本願寺でも法制が整備された。寛文8年(1668)法制5ヶ条(祖書、法衣、葬式等)と9ヶ条(末寺僧徒の生活行儀)、延宝4年(1676)法制3ヶ条(聖教典籍を猥りに講じたり浅学の侍僧が唱導することを禁止)、享保6年(1721)法制5ヶ条(官職など)が定められた《寺法品節・本願寺条制・本願寺律令》。また、元禄2年(1689)初めて報恩講の差定を堂内に貼り、坂東節を停めて八句念仏和讃とした。元禄7年(1694)魚山秀雄に「声明集」3帖を書写させている。また、寂如上人はみずから「讚仏偈式」1巻を著している。

異義事件と学林復興 寛文3年(1663)紀伊黒江作太夫(十劫秘事)、寛文5年(1665)大坂浄光寺、延宝4年(1676)越後・信濃、元禄8年(1695)河内出口光善寺寂玄・摂津名塩教行寺寂超の異義があった。寛文3年(1663)西吟没後は、法輪寺戒雲・教宗寺閑隆・光隆寺知空、あるいは善巧寺空吟・光瀬寺乘恩・尊超寺了海の3人が能化の代役を命じられ、所化の住む屋敷を仮講所として開講した。元禄8年(1695)学林を六条東中筋に再興し、知空が『楞嚴経』を講義した。

宗祖 450 回忌 宝永7年(1710)阿弥陀堂門新築など、遠忌準備のため諸堂の修理營繕を行った。正徳元年(1711)宗祖450回忌が修された。法要に先立って集会所に法宝物が陳列された(法宝物展観の初め)。4月には祝能が3度催された。

別院・本廟 築地(延宝7年<1679>)、津村(元禄6年<1693>・享保9年<1724>)両別院の焼失により再興したほか、北山別院(延宝6年<1678>)・相模小田原別院・秋田御坊(寛文3年<1663>)を創始した。寛文4年(1664)越前福井別院・紀州鷲森に輪番所を置いた。大谷本廟については、宗祖450回忌に伴う修繕のほか、元禄11年(1698)「祖壇」額、元禄15年(1702)仏殿に寂如上人筆「龍谷山」額、享保元年(1716)拜堂に寂如上人筆「明著堂」額が掲げられた。

交流 寛文元年(1661)法眼・大僧都、寛文3年(1663)正僧正、寛文12年(1672)大僧正に任じられた。正徳元年(1711)霊元上皇から雁三羽、正徳5年(1715)霊元法皇から宸翰懐紙「野沢始迎春」、享保5年(1720)霊元法皇から鷹納豆を贈られた。仏教諸宗との交流も行った。元禄10年(1697)と同13年(1700)叡山大会に参詣した。享保6年(1721)最澄900回忌に代参として下間宮内卿を遣わし、その後比叡山に赴いた。元禄15年(1702)知恩院の源空聖人忌に参詣し、新黒谷にも参詣している。享保9年(1724)青蓮院の慈鎮和尚500回忌に参列・焼香した。享保10年(1725)教行寺を知恩院の源空聖人忌に派遣した。

示寂 享保10年(1725)病が悪化し、7月8日、75歳で入寂した。歴代宗主の中で最長の63年の治山であった。8月2日に本山西郊で火葬、12日に大谷に納骨された。後継については、貞享3年(1686)九条兼晴第3子保(住如上人)を嗣法とし、元禄5年(1692)住如上人とともに江戸に向かい将軍徳川綱吉に謁見した。

■聖教・史資料

経蔵 延宝6年(1678)良如上人17回忌にあたって経蔵を建立し、慶讃会のために「三部経」3000部を作った。翌年、天海版大蔵経(東叡山経本)を納めた。正徳元年(1711)宗祖450回忌前に寂如上人筆「転蔵輪」額が掲げられた。

刊行 寛文8年(1668)『正信偈和讃』を刊行した。当時は『御文章』版本の各種抜粋本が使用されていたが、その統一を図って、貞享元年(1684)新規開版し跋を書いた。跋に「此五帖一部之文章」とあることから、『御文章』と呼ばれるようになった。

名号・影像 延宝2年(1674)良如上人13回忌にあたり、金泥九字名号と十字名号を各1幅染筆し、青蓮院尊照親王が上下讃銘を書いたものを、御影堂両余間に掛けた。延宝4年(1676)病のため、諸寺諸尊像等の裏記を書くことができなくなったため、印記を以て授与した(御判形御影)。天和2年(1682)良如上人御影の讃文を作り、曼殊院良尚親王が染筆した。天和3年(1683)実如・証如・顕如・准如各上人御影の衣色を緋と改めた。貞享3年(1686)九字・十字名号を小幅から大幅に改めた。また狩野洞雲・養朴に六高僧像2幅を描かせ、寂如上人自作の讃文を記して仏龕の両脇に掛けた。宝永4年(1707)以降、蓮如・証如・顕如・如信・覚如・実如・善如・綽如・存如・従覚・巧如各上人の御影を順次製作し、讃を書いた。

講義・著作 貞享3年(1686)御影堂北余間にて祖書を講じた。元禄5年(1692)白書院孔雀の間にて『阿弥陀経』の大意を講じた。享保4年(1719)『進学図三字』を書し、勝授寺寂清に与えた。

町版など 寛文9年(1669)河村利兵衛は寛文版『教行信証』を刊行した。元禄2年(1689)侯野七郎兵衛・武田治右衛門は『蓮如上人御一代記聞書』を刊行した。恵空は享保6年(1721)頃までに『仮名聖教目録』を編録している。

【参考文献】

大沼法龍・鷲尾教導『聖の跡—実如・寂如・本如の御事績』(龍谷会、1924)、宮崎圓遵『寂如上人と和讃講』(岐阜教徳寺、1936)

第15代宗主 住如上人

延宝元～元文4年(1673-1739) 67歳

童名：保。諱：光澄。諡：信順院。

■家族

九条兼晴の第3子。貞享3年(1686)寂如上人の猶子となり、享保6年(1721)寂如上人の第16子(7女)常君(瑞光院如浄)と結婚した。

■経歴 一各地別院の整備に尽力—

誕生・継職 延宝元年(1673)10月10日に誕生し、3歳で入寺した。貞享3年(1686)11月13日14歳で寂如上人の養子となった。元禄2年(1689)17歳で得度、法嗣となり、報恩講で式文を読誦した。元禄3年(1690)から免物を代筆するようになり、元禄7年(1694)初めて剃刀式を行い、元禄13年(1700)晨朝に調声するなど、長く寂如上人を補佐していた。享保10年(1725)寂如上人の示寂により53歳で継職した。継職時には考槃院寂円・本徳寺寂宗・顕証寺寂峰らと不和があったが、享保11年(1726)寂如上人第18子直丸(湛如上人)を嗣法とし、和解した。

別院の整備 享保10年(1725)紀州鷺森別院の再建を行った。享保11年(1726)と同16年(1731)には福井別院、津村別院に再建の消息をそれぞれ授けている。享保17年(1732)北山養源寺の堂宇を移して山科別院仏殿とし、蓮如上人像を安置した。在職中には堺御坊・伏見御坊も再建している。

朝廷 元禄5年(1692)正僧正、元禄11年(1698)大僧正に任じられ、紫衣を着用した。享保11年(1726)霊元法皇から牡丹花及び嘉肴を授与された。將軍徳川綱吉の妻が住如上人の父九条兼晴の妹であり、朝廷や幕府とも親密であったとされる。

示寂 元文4年(1739)病を患い、8月6日、67歳で示寂した。本山西郊で火葬され、大谷祖隴良如上人の南に納骨された。

■ **聖教・史資料**

享保13年(1728)伝来の本尊・聖教等を修補すべきという幕命を諸国に触れた《富島記》。元文4年(1739)『和讃』・『御文章』授与の礼銭の額を定めた。

第16代宗主 湛如上人

享保元～寛保元年(1716-1741) 26歳

童名：直。諱：光啓。諡：信暁院。

■ **家族**

寂如上人の第18子。母は竹中氏。元文5年(1740)閑院直仁親王の息女始宮(光暁院如薺)と結婚した。

■ **経歴** 一山科蓮如上人廟の裁決一

誕生・継職 享保元年(1716)6月27日に誕生した。父寂如上人に似て諸事に優れ、特に文才に長じたと伝えられている。享保11年(1726)住如上人の養子となり、嗣法となった。享保13年(1728)住如上人に随って堺・大坂を遊化した。享保14年(1729)九条輔実の猶子となり、直君と改名した。享保15年(1730)15歳で得度した。享保19年(1734)住如上人とともに江戸に向かった。同年、月並永代経の焼香を代行、翌年には代筆している。元文4年(1739)住如上人の示寂によって24歳で継職した。

山科蓮如上人廟 山科の蓮如上人廟は、慶安3年(1650)や、寛文5年(1665)、享保18年(1735)に所属を争うなど、東本願寺と長い争訟があった。元文4年(1739)幕府により東西門徒の参拝を隔年とされ、次いで東西両門徒の拜礼が禁じられた。元文5年(1740)幕府の裁決が下ったとされる《山科記録・祖門記》。

交流 享保15年(1730)法眼、翌年大僧都、翌々年正僧正、元文4年(1739)大僧正に任じられた。元文3年(1738)知恩院忌に参詣した。元文5年(1740)寛永末寺帳の不足分13冊を幕府に提出している《本願寺律令》。

示寂 寛保元年(1741)6月6日大谷に参詣したが、その歸りに病が重くなり、翌7日、26歳の若さで示寂した。26日本山西郊で火葬された。大谷では寂如上人の北に墳墓が築かれ、塔碑が建てられて納骨された。湛如上人の弟静如上人が嗣法となり、8月3日継職。静如上人は10月25日九条植基の猶子となった。

■ **聖教・史資料**

大通寺南谷(幻華)に書を学び、文辞を好んだといい、「飛雲閣記」を著したとされる。元文元年(1736)大谷四時佳興を見て8題を探開し、詩を賦した《祖門記》。

【参考文献】

八尋慈薫編輯『巧如湛如上人芳蹟』(本願寺新報社出版部、1940)

〈近世篇2〉本願寺聖教の蔵版化

■ **江戸時代中期・後期**

元禄期の経済成長を経て貨幣経済が農村にも浸透し、城下町・港町・宿場町・門前町などが形成されて都市化が進んだ。明暦の大火(1657)以降、幕府は財政難に陥り、

度重なる大飢饉などもあって、享保の改革、寛政の改革、天保の改革などが推進された。天保11年(1840)イギリスと清国の間でアヘン戦争が起こると、欧米諸国への危機感が高まっていたが、嘉永6年(1853)アメリカのペリーが来航、翌年日米和親条約が結ばれると、ロシア・イギリス・オランダとも同様の条約が結ばれ、横浜・長崎などが開港した。国内では、尊王攘夷運動、公武合体運動などが起こったが、薩長両藩らが討幕に転じた。慶応3年(1867)徳川慶喜は大政奉還に踏み切った。同年、岩倉具視や薩長両藩は王政復古の大号令を強行した。

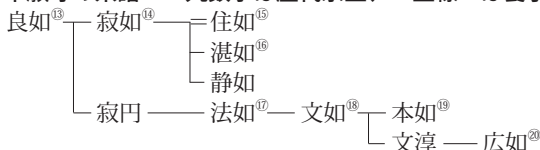
■ 仏教・真宗 — 法義論争 —

寛保元年(1741)幕府は、寺院の本末や法義の訴訟は、触頭・本寺が裁許するよう通達した。本願寺では明和の法論や三業惑乱など、法義論争が続いた。『大谷本願寺通紀』によると、延享元年(1744)の末寺数(築地支配13ヶ国を除く)は、掛所38、末寺7093、道場810であった。天明6年(1786)の寺院数は連枝13、院家45、内陣85、余間331、三之間40、初中後37、飛檐約700、学林所化1175人、都下宗徒5万4586人とされ、東本願寺・仏光寺・専修寺門徒を合算すると、都下の門徒は19万8669人を数えたとされる。安永元年(1772)の大谷墓塔は約8000基を数えた。

■ 聖教 — 真宗法要と蔵版 —

大きな聖教編纂事業として、『真宗法要』(和語聖教の集成本)の刊行があった。また、既に町版として流布していた『教行信証』・『六要鈔』・『校点浄土三部経』・『七祖聖教』などが蔵版化され、宗主または嗣法の跋が加えられた。中世では本願寺特有の聖教を門末に授与するものであったが、近世中期には、『和讃』や『正信念仏偈』などを除く聖教の蔵版化が始まり、天保11年(1840)本山から末寺への達書を以て一応の完成を見た。蔵版化には、本願寺の管理によって聖教本文の権威性が保たれるとともに、希望する者に広く行き渡るという意義があった。

■ 本願寺の系譜 ※丸数字は歴代宗主、二重線＝は養子関係



嗣法は九条家の猶子となり、准如上人以降の宗主はいずれも大僧正に任じられることは変わりなかった。湛如上人の嗣法静如上人が引退したため良如上人の孫法如上人が継職、本如上人には実子がいなかったため甥広如上人が宗主となった。

第17代宗主 法如上人

宝永4～寛政元年(1707-1789) 83歳

童名：春千代満。諱：光闡。字：子武。号：薰堂、乾亨齋。諡：信慧院。

■ 家族

良如上人の孫で、播州亀山本徳寺寂円の第2子。母は円成院(法寿)。妻は如教(誠心院)。子は31子。文如上人、闡教、闡耀、益姫、秀子、闡道、闡実、佳子、闡幽、晴子、闡海、闡郁、富喜、千重、法応、加禰、政姫、闡侃、法住、万喜、扶子、辰丸らがいる。

■経歴 一法義論争への対処一

誕生・継職 宝永4年(1707)10月9日本徳寺寂円の子として誕生した。享保5年(1720)河内顕証寺に入寺し得度、諱を常剛、法名を寂峰と称した。寛保3年(1743)静如上人が引退し、寺務を顕証寺寂峰(法如上人)への委譲を表明したため、37歳で継職した。諱を光闡とし、九条植基の猶子となった。

遠忌・大遠忌 寛延元年(1748)蓮如上人250回忌では、集会所に27の法宝物が陳列された。この法要は、蓮如上人遠忌法要の最初とされる。宝暦10年(1760)には宗祖500回忌にあたって、元和4年(1618)に建立された阿弥陀堂が仮御堂であったため本格的に再建され、御影堂も修復された《阿弥陀堂遷仏記・考信録》。集会所では50の法宝物を陳列・公開した。450回忌にて法要直前まで公開したところ、大混雑が生じたため、前年に繰り上げて開催された。宝暦11年(1762)宗祖500回忌が修され、声明作法も改められた。このとき用いられた『浄土三部経』は、法如上人の染筆によるものとされる。

学林と明和の法論 宝暦元年(1751)8月学林の建築を始め10月に上棟した。寛保元年(1741)若霖没後15年は学林に講主は無かったが、宝暦5年(1755)越中円満寺義教が能化となった。明和元年(1764)播州真浄寺智暹が『浄土真宗本尊義』を著し、翌年からその出版をめぐる学林と対立した。明和4年(1767)功存らと智暹らが本山で対論し、法如上人は双方是非無しと断じた《明和法論次第》。同書は絶版となったが、智暹側が反発した。

宗名一件 安永2年(1773)宗名を浄土真宗に統一すべき旨を紀伊藩に出願し、翌安永3年(1774)紀州藩で浄土真宗の宗名を称した。同年、幕府に浄土真宗の公称を請願したが、増上寺の反対によって容易に解決されなかった。築地輪番の玄智は宗名出抛について幕府に答申している《宗号略書》。安永4年(1775)摂津高槻藩で浄土真宗の宗名を称した《祖門記》。安永5年(1776)幕府は築地別院に宗名一件の意見書を徴し、天明2年(1782)摂津茨木浄土宗梅林寺の本願寺門徒送証文の宗名改称願を却下した《顕真弁付録・通紀》。寛政元年(1789)寺社奉行に口上書提出したが《甲子夜話》、幕府は審議中の旨を申し渡した。

異義事件 宝暦4年(1754)京都の秘事党(土蔵秘事)が発覚し、宝暦7年(1757)幕府の裁定によって処罰され、僧樸等を諸寺に巡歴させて門侶に警諭した。宝暦13年(1763)豊前桑洲に憲栄・道粹・継成を遣わして邪偽を糾明した。明和4年(1767)江戸で京都と同様の秘事党(御蔵秘事)が発覚し、幕府が罰した。安永7年(1778)江戸秘事が発覚した。『大谷本願寺通紀』によれば、天明4年(1784)の春が宝暦以来の安心異諍の中で最も甚だしかったとされる。天明5年(1785)周防岩国で秘事の新結衆講が発覚し、説法や永代読経会が禁じられた。

功存 宝暦12年(1762)功存は『願生婦命弁』を著して、無婦命安心に対して三業婦命説を示した。学林の道粹はこれに憂慮して、憲栄・僧樸と審議し6ヶ条の疑問を呈した。『願生婦命弁』は、明和元年(1764)に刊行されるが、のちの三業惑乱の発端となった。道粹は宝暦13年(1763)『婦命弁問尋』を著した。大麟は天明4年(1784)『真宗安心正偽篇』・天明6年(1786)『真宗安心正偽後篇』を著し功存説を批判したが、豊前崇郭は『傍観正偽篇』、玄仗は『彈妄篇』を著して大麟の説に反論した。天明7年(1787)三河善水が『興復記』を著し功存説を批判し、各地に議論が起るようになった。功存は明和6年(1769)能化となり、

寛政8年(1796)77歳で没している。

興正寺一件 興正寺との不和が続き、天明3年(1783)興正寺の寺法違反を幕府に訴えている。幕府は和解を勧めたが、解決に至らなかった。

諸堂・別院 天明4年(1784)江戸大火により、築地別院の殿堂・経蔵・諸構及び子院57所が類焼した。天明5年(1785)市谷浄栄寺高範が仏堂を奉じ、仮殿とした。天明8年(1788)京都大火は本願寺にも及んだ。阿弥陀堂・本堂門・接待所・蔵板所・鼓楼・学林・町役所や境内17町の民戸が罹災し、『御伝鈔』や『真宗法彙』の板木なども焼失した。宗祖御影は大通寺、伏見御坊へ遷して避難した《天明大火書類》。なお、在職中には吉崎・金沢・福井・夜摩品・北山別院の整備に尽力した。**越前遊化** 寛政元年(1789)越前を遊化し、福井・吉崎に向かい、雑遊式などを行った。従者500人で向かったが、その行路は50年に一度の大雨があったとされる。准如上人以来190年ぶりの北陸巡教であった。

朝廷・幕府 寛保3年(1743)法眼・大僧都、延享元年(1744)僧正、延享4年(1747)大僧正に任じられ、紫衣を着用した。延享2年(1745)幕府に末寺帳を提出している。**示寂** 寛政元年(1789)10月24日、83歳で示寂した。遺体は対面所に安置され、11月17日阿弥陀堂で葬儀が修された。本山西郊で火葬・収骨され、12月13日に大谷祖隴の南側に納骨された。讓状は、宝暦9年(1759)と安永4年(1775)文如上人に与えていた。

■ 聖教・史資料

真宗法要 町版などが大量に流通する中で、聖教の真偽が鑑別され、真宗聖教の統一が図られた。宗祖500回忌の記念事業として、親鸞聖人・覚如上人・存覚上人・蓮如上人らの和語聖教35部67巻を31帖に収録した『真宗法要』が編纂された。宝暦9年(1759)憲栄・僧樸が編集に着手し、明和2年(1765)に完成、明和3年(1767)に本願寺蔵版として刊行された。法如上人が序を記し、文如上人が跋を作った。明和4年(1767)には『蔵外真宗法要』が刊行され、後に本願寺蔵版となった。『真宗法要典拠』、『真宗法要醒誤』など関連典籍も制作された。

蔵版と刊行 寛延2年(1749)『和讃』・『御文章』等が刊行された。『教行信証』・『六要鈔』については、安永2年(1773)摂津13日講が両書の古版を購入・寄進し、安永5年(1776)摂津12日講が蔵版に備えて両書の版木を寄進した。同年『教行信証』明暦版を蔵版にした《本典六要板木買上始末記》。天明4年(1784)蔵刻のために『選択集』古版を買得した。同年『領解文』(文如上人識語)を刊行した。天明5年(1785)『御伝鈔』古本を校正し、清濁・句読点を付して新刻した。天明7年(1787)『領解文』を新刊、門末に授けた。

夏御文章 安永7年(1778)『夏御文章』を書写し、第4通を2つに分け全5通とした《本願寺蔵法如上人書写本奥書》。

消息 寛政元年(1789)法如上人と文如上人は各々法語消息を著して、対面所にて門下に告げた。これを『御形見御書』という。三業具など諸国の安心諍訟の教化によるといわれるが、その内容は蓮如上人の法語に依ったものとされる。

関連聖教 僧鎔や玄智らによって聖教の編纂や目録化がなされた。僧鎔は、宝暦3年(1753)『真宗法彙』、寛延3年(1750)『真宗法彙目録及左券』を編纂した。玄智は、安永元年(1772)『大谷校点浄土三部経』、安永2年(1773)『浄土三部経字音考』、安永3年(1774)『考信録』、安永7年(1778)『浄土真宗教典志』、

天明4年(1784)『本山実録』、天明7年(1787)『大谷本願寺通紀』(寛政4年<1792>頃増補)、天明7年(1787)『真宗法彙』などを編集・刊行している。その他、安永9年(1780)了正『三部妙典』、天明3年(1783)智洞『龍谷学贄内典現存目録』、天明4年(1784)仰誓『真宗法要典拠』が編集・刊行された(安政3年<1856>超然校補)。

第18代宗主 文如上人

延享元～寛政11年(1744-1799) 56歳

童名：完千代、幸。諱：光暉。字：子晃。号：悠々子、日遇斯光。諡：信入院。

■家族

法如上人の長男(第5子)。明和7年(1770)二条宗基の息女五千と結婚した。子に阿茶、孟(本如上人)、昔丸、万姫、悠姫、憲姫、女子、男子(春光院如芳)がいる。

■経歴 一法義論争への対処一

誕生と嗣法時代 延享元年(1744)4月19日に誕生した。宝暦3年(1753)法如上人の嗣法、九条尚実の猶子となり、宝暦4年(1754)に得度した。同年法眼・大僧都、宝暦6年(1756)僧正、明和2年(1765)大僧正に任じられている。宝暦9年(1759)法如上人から讓状が与えられた。嗣法時代は37年に及び、法如上人とともに各地へ赴くなど宗政の補佐を行った。宝暦10年(1760)煤払で法如上人は御影堂、文如上人は阿弥陀堂を担当した(両堂煤払いの初め)。明和7年(1770)幕府に本徳寺長子義千代(法位)を嗣法とすることを告げた。安永4年(1775)改めて法如上人より讓状を受けた。安永7年(1778)孟(本如上人)が誕生、天明2年(1782)義千代が17歳で没した。なお、嗣法時代には、滴翠園の整備に積極的に関わった。

継職 寛政元年(1789)法如上人の示寂により46歳で継職した。寛政10年(1798)蓮如上人300回忌を勤め、集会所で法物を展観した。在職中は、明和の法論の事後処理にあたり、三業惑乱の最中であつた。三業惑乱は寛政年間に至っていよいよ紛糾を極めた。また、幾たびか火災にあつた築地別院を再建するなどしている。

学芸 幼少より病弱であつたが、書道・詩歌・雅楽・声明・絵画・茶道等に造詣が深かつた。宝暦6年(1756)山田周蔵から漢籍、松下烏石から習字を学び、宝暦7年(1757)僧樸から宗学・唐詩訓解・五言絶句等を学んだ《新御所様次日記》。安永元年(1772)滴翠園で詩会を催し、以後定例とし《錦花殿記》、安永5年(1774)には同じく300首を集めた《考信録》。宝暦10年(1760)柳原大納言光綱に和歌を学び、同年大谷本廟報恩講にて和歌100首、宝暦11年(1761)宗祖500回忌に和歌50首を詠んだ。同年金竜道人に文章の規範・詠詩を学び、島村勝之進に茶を習った。明和4年(1767)四辻大納言公亨に箏を習った《錦花殿記》。寛政2年(1790)利休200回忌にあたり、藪内宗堅に漢詩を送り、寛政4年(1792)10月藪内宗堅から『茶法口義』を受け、寛政6年(1794)茶道免許を得た。

示寂 明和5年(1755)本徳寺法位(義千代)を嗣法としていたが、天明2年(1782)に示寂していた。寛政11年(1799)2月25日に遺言の消息(本如上人書)を受け、6月11日に本如上人と顕証寺文淳に遺言を書き留めさせた。6月13日辞世の2句を残し、6月14日、56歳で示寂した《本如行状記・信入院殿御葬送御中陰記》。

7月4日に葬儀が行われた。天明7年(1787)九条尚実の猶子となっていた本如上人が継職した。

■ 聖教・史資料

前代法如上人の聖教刊行事業に関与した。天明7年(1787)に刊行された『領解文』には文如上人の識語があり、『真宗法要』の校合にも携わって跋を記している。なお、自筆日記『観聆録』は安永4～7年(1775-78)の記録である。家臣の業務日誌に『錦花殿御次日記』がある。

第19代宗主 本如上人

安永7～文政9年(1778-1826) 49歳

童名：孟。諱：光摂。号：碧山、不捨。諡：信明院。

■ 家族

文如上人の次男。寛政8年(1796)二条治孝の息女誠と結婚した。

■ 経歴 一 三業惑乱の裁決

誕生・継職 安永7年(1778)10月24日に誕生した。天明7年(1787)九条尚実の猶子となった。寛政4年(1792)得度、法眼となった。寛政10年(1798)には文如上人消息を書し、文如上人遺言の消息も本如上人が書いている。寛政11年(1799)文如上人の示寂により22歳で継職した。寛政12年(1800)には大僧正に任じられている。

三業惑乱 功存が宝暦12年(1762)に無帰命安心の異義に対して願生帰命と三業安心を主張して著した『願生帰命弁』を発端とし、学林(新義派)と各地の学匠(古義派)との間で三業安心をめぐる対立した論争が三業惑乱である。寛政9年(1796)功存は没したが、寛政9年(1797)に第7代能化となった智洞も願生帰命と三業安心を強調したため、同年大瀛は『浄土真宗金剛鏢』を著して批判した。本願寺内では事態は収拾せず、享和2年(1802)以降は幕府の介入があった。文化2年(1805)本如上人は新義派が不正義であると裁定し、文化3年(1806)寺社奉行脇坂淡路守によって裁決が行われ、本山は100日閉門となった《反正紀略》。同年、教義上では本如上人が『御裁断申明書』・『御裁断御書』を發布して決着を見た。三業惑乱後は能化職を廃して学識の優秀な者を1年交代制の講師とした。文政7年(1824)に勸学、文政8年(1825)に司教を設けて学頭1人の制を改めた。なお、先々代法如上人の頃からの興正寺一件について、文化8年(1811)幕府の裁断が下っている。

宗祖550回忌 文化7年(1810)およそ10年をかけた御影堂の修復事業を完遂し、文化8年(1811)宗祖550回忌を勤修した。同年葬儀の導師諷経についての達書を発している《本願寺条制》。大遠忌前には、文政4年(1821)には親鸞聖人茶毘所の考定を行い、清水の西ソバツボとした《親鸞聖人御茶毘所延仁寺御旧跡》。

文化 絵画に関する造詣が深く、吉村孝敬に師事し、碧山または不捨と号した。円山応挙や呉春などとも交流した。また、雅楽・和歌・茶道にも優れた。

示寂 文政9年(1826)11月4日二条治孝の葬送の帰途に発病し、12月12日、49歳で示寂した《本如伝・本如行状記》。翌年1月17日葬儀を行った《信明院葬送次第》。後継については、実子がおらず、文政2年(1819)顕証寺光沢(広如上人)を嗣法としていた。

■ 聖教・史資料

蔵版 文化 8 年（1811）に『大谷校点浄土三部経』を本願寺蔵版『校点浄土三部経』として再刻した。文化 13 年（1816）書籍刊行の規制を定めている《龍谷大学三百年史》。

関連聖教 寛政 11 年（1799）大坂長円寺崇興が『七祖聖教』を刊行した。なお、文化 8 年（1811）東本願寺は『真宗仮名聖教』を蔵版として刊行している。

【参考文献】

大沼法龍・鷲尾教導『聖の跡—実如・寂如・本如の御事績』（龍谷会、1924）

第 20 代宗主 広如上人

寛政 10～明治 4 年（1798-1871） 74 歳

童名：祥寿。諱：摂衆、光沢。得度時法名：本了。諡号：信法院。

■ 家族

顕証寺暉宣（文如上人の 3 男文淳）の第 2 子。母は顕証寺法真（闍教、文如上人の弟）の娘。妻は九条尚忠の養女祥子（鷹司政熙息女、光輝院如順）。

■ 経歴 一財政改革と幕末維新—

誕生・継職 寛政 10 年（1798）6 月 1 日に誕生した。文化 6 年（1809）12 歳で得度、河内顕証寺に入寺した。文化 8 年（1811）法眼。文政 2 年（1819）本如上人の嗣法として本願寺に入った。同年法印・大僧都、文政 3 年（1820）正僧正、文政 7 年（1824）大僧正に任じられた。文政 9 年（1826）本如上人示寂により、29 歳で継職した。文政 10 年（1827）参勤法中に本如上人の遺訓を伝えている。文政 12 年（1828）異義誠告の消息を諸国に授け、天保元年（1830）学林に「真宗学序」額を学林に授けるとともに宗意安心の研究方針について勧告した。

財政改革 宝暦・明和以降の宗名一件・興正寺一件・三業惑乱などの重大事件、御影堂の大修理などにより、本山の負債は 60 万両ともされた。天保元年（1830）石田敬起を起用し、本願寺の財政再建や機構改革に取り組んだ。天保 4 年（1833）に第 1 次財政改革は満期となったが、さらに 2 年延長した《天保改革一件書類》。なお、年賦・月賦返済はその後も続行し、文久 2 年（1862）に再び財政悪化した。**堂舎の整備と宗祖 600 回忌** 安政 3 年（1856）宗祖 600 回忌お待受の消息を披露、大谷本廟を修理・整備した。安政 4～文久元年（1857-1861）阿弥陀堂、安政 5～万延元年（1858-1860）御影堂の修復を行った。文久元年（1861）宗祖 600 回忌法要を勤修した。両堂等の修復や内陣彩色を担当した円山派の吉村考文（了斎）を中心に書院障壁がの修復・新調などが行われた。

新門跡・新々門跡 天保 12 年（1841）河内顕証寺撰真の長男光淳（童名：実枝、普賢院広潤）を猶子とした。弘化 4 年（1847）広潤を嗣法とし、徳如（信歓院）と改称、九条尚忠の猶子となって新門跡と称した。嘉永 3 年（1850）岡田栄子の息女為子を母として息男峩（明如上人）が誕生。安政 4 年（1857）峩を徳如上人の養子とし、峩は九条尚忠の猶子となって万延元年（1860）得度、諱を光尊、法名を明如と名乗って新々門跡と称した。ここに、広如上人・徳如新門跡・明如新々門跡の 3 人で寺務を執る体制となった。なお、在職中には、築地別院が火災や地震、大風によって度々焼失・破損するなどしたため、再建に当たった。また、興正寺と融和し、北海道の開教にも尽力した。安政元年（1854）には末寺数が 10669 を数

えた《末寺統計帳》。

幕末維新期の動向 文久2年(1862)尊王攘夷の議を決し、文久3年(1863)諸国の門末に諭して、中国・九州には使僧を派遣した。元治元年(1864)禁門の変によって徳如新門・明如新々門とともに大谷へ退き、山科別院へ向かった。禁門の変では総門・学林・総会所などが焼失した。その後、明如新々門が宗祖御影を奉じて帰山した。明治元年(1868)鳥羽・伏見の戦いでは朝廷を守護し、教書を作成して諸国の門末を諭した。また、東本願寺の徹如上人と東西分派後初めて会談した。この頃から廃仏毀釈の運動が起こり、門末へ廃仏問題について論達が命ぜられた。

示寂 明治元年(1868)徳如新門が示寂し、光尊(明如上人)を法嗣とした。明治4年(1871)7月明如上人に遺訓を口授し《遺訓御書》、8月19日、74歳で示寂した。9月19日に葬儀が行われた。

■ 聖教・史資料

刊行 文政9年(1826)長円寺蔵『七祖聖教』版木を本願寺蔵版とした。文政10年(1827)4月『御文章』を開版した(合帖本の嚙矢)。同年、『教行信証』明暦版を改刻し、天保8年(1837)『教行信証』明暦版(小本)を刊行した。天保9年(1838)小本『正信偈和讃』(章譜付)が開版された。天保11年(1840)には各末寺に達書が送られ、西本願寺の蔵版は一応の完成を見たと言われる。安政3年(1856)、嘉永4年(1851)より超然らによって編纂されていた『校補真宗法要典拠』が刊行された。**写字台文庫** 弘化3年(1846)より本願寺歴代宗主が収集・伝持してきた書籍等を写字台文庫として10年がかりで整備し、安政3年(1856)に完了した。

関連聖教 天保3年(1832)安永9年版『三部妙典』が再版された。東本願寺は天保11年(1840)寛永版『教行信証』を改刻し、嘉永2年(1849)『七祖聖教』(大谷派依用十行本)が刊行された。仏光寺では、弘化元年(1844)寛文版を改訂した『教行信証』を刊行し、嘉永元年(1848)小本『三部妙典』が開版された。このころは、天保6年(1835)小本『御文章』偽版、天保9年(1838)悟澄『教行信証』、嘉永元年(1848)近江屋『御文章』など、偽版・私家版が多く刊行されている。

【参考文献】

『広如上人芳績考』(教海一瀾社、1902)

〈近代・現代篇〉全書・集成本の編纂とデジタル化

■ 明治、大正、昭和、平成時代

明治元年(1868)から約1年半にわたる戊辰戦争では新政府軍によって旧幕府勢力が解体され、明治10年(1877)西南戦争で土族の反乱が収束に向かった。国内では、明治22年(1889)に大日本帝国憲法発布、翌年第1回帝国議会が開催され、近代国家の体制が整備されていった。対外的には条約改正交渉の後、明治27年(1894)日清戦争、明治37年(1904)日露戦争と対外戦争が続いた。さらに、大正期には第1次世界大戦(1914-1918)や関東大震災(1923)などがあった。昭和前期には日中戦争(1937-1945)と第2次世界大戦(1939-1945)があり、戦線が拡大した。昭和16年(1941)には太平洋戦争が開戦したが、昭和20年(1945)終戦を迎えた。戦後は連合国の占領下におかれ、非軍事化と民主化が推し進められ、昭和26年(1951)サンフランシスコ平和条約で独立国としての主権を回復した。

国際社会では冷戦が本格化していったが、日本は自由貿易体制の中で復興と経済成長を遂げていった。冷戦後は、バブル経済の崩壊後の景気低迷、安全保障問題、「戦後」の問題など、現在に引き継がれる諸問題への対応が浮上している。平成23年(2011)東日本大震災が発生し、大地震とその後の津波、原発事故などで東日本を中心に甚大な被害をもたらした。

■ 仏教・真宗 —教団の近代化と社会への関与—

明治政府のもと、神仏分離政策が推進され、廃仏毀釈とよばれる仏教排斥運動が全国に展開した。仏教各宗派は近代化を推し進め、財政や伝道教化の体制を整えるようになり、宗務院や宗議会在が設置されて教団体制を確立した。日清戦争以降、各戦争時には仏教界には戦争協力を行う動きがあった。戦後は、伝統仏教教団の枠組みを超えて全日本仏教会在が組織され、国際会議も開催されるようになり、現代社会に積極的に関与しようとする動きも見られる。現在の日本には約7万5千、浄土真宗本願寺派としては約1万の寺院が存在している。現代は、江戸時代以来の寺檀制度を基盤としてきた寺院が、少子化、高齢化、過疎化、核家族化などによって変化を迫られ、さまざまな課題に直面している。

■ 聖教 —近代仏教学と大蔵經の刊行—

近代仏教学が導入され、文献学的・史学的アプローチから仏教が研究されるようになった。その成果の一つとして、多くの大蔵經・全書・叢書等が刊行された(刊行年については、便宜上、西暦年のみの表記とする)。

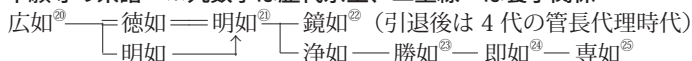
大日本校訂大蔵經(1881-1885)	日本校訂大蔵經〔卍正蔵〕(1902-1905)
大日本続蔵經〔卍続蔵〕(1905-1912)	縮刷大蔵經〔博文閣〕(1911-1914)
大日本仏教全書(1912-1922)	日本大蔵經(1914-1922)
国訳大蔵經(1917-1928)	仏教大系(1918-1923)
大正新脩大蔵經(1924-1928)	現代意識 根本仏教聖典叢書(1923-1924)
国文東方仏教叢書(1925-1933)	国訳一切經・印度撰述部(1928-1936)
昭和新纂国訳大蔵經(1928-1932)	大日本校訂大蔵經〔縮蔵〕昭和再訂本(1935-1938)
南伝大蔵經(1935-1941)	国訳一切經・和漢撰述部(1936-1988)
大日本仏教全書(鈴木財団版 1973)	日本大蔵經・増補改訂(鈴木財団版 1973-1977)
新纂大日本続蔵經(1980-1898)	新国訳大蔵經(1993-)
大正新脩大蔵經 CD-ROM 版(1995-)	聖語蔵經卷・デジタルデータ(2000-)
大正新脩大蔵經テキストデータベース〔SAT〕(2008-)	

また、中国や朝鮮半島では、高麗再雕大蔵經(木板刷 1898・1899・1915・1937・1958-1961、影印〈東国大学校版 1957-1976・東洋仏典研究会版 1971-1975〉)、頻伽精舎校刊大蔵經(排印 1911-1913)、影印砂版大蔵經(影印 1933-1936)、影印宋蔵遺珍(影印 1935)、龍蔵〔乾隆大蔵經〕(木板刷 1936・1989、影印 1990-1991)、普慧蔵(排印 1946-)、ハングル大蔵經(排印 1965-)、脩訂中華大蔵經(影印 1974-)、仏教大蔵經・続蔵(影印・活字 1978-1984)、仏光大蔵經(排印 1983-)、中華大蔵經〔漢文部分〕(影印 1984-)、文殊大蔵經(排印 1986-)、房山石經〔遼金部分〕影印 1986-1993、影印 2000)、応県木塔遼代秘蔵(影印 1991)、C-BETA〔電子仏典集成〕(デジタルデータ 1998-)、洪武南蔵(影印 1999)、永楽北蔵(影印 2000)、嘉興蔵(影印 2008)、開宝遺珍(影印 2010)、高麗大蔵經初刻本輯刊(影印 2012)、思溪版大蔵經(影印、予定)が刊行・

公開されている。

近代・現代では、寺院等に所蔵される法宝物が盛んに公開され、複製本・写真版が刊行されるなど、貴重な聖教・史資料に触れることが可能となった。近年では、SAT（大正新脩大藏経テキストデータベース）、『浄土真宗聖典』聖教データベース・オンライン検索（浄土真宗本願寺派総合研究所 HP）、浄土宗全書検索システムなど、デジタル化による聖教の本文テキストや画像の公開が進み、聖教・史資料公開の形態が多様化している。

■本願寺の系譜 ※丸数字は歴代宗主、二重線＝は養子関係



明如上人以降は、宗主が主導して前宗主の葬儀を行うようになった。鏡如上人は伝灯奉告法要を初めて行い、勝如上人は法統継承の直喩を発している。

第21代宗主 明如上人

嘉永3～明治36年（1850-1903）54歳

童名：峩。諱：光尊。諡号：信知院。

■家族

広如の第6子（5男）。母は岡田栄柄の女為子（蓮界院寿照）。妻は如尊（心光院）。子には鏡如上人（大谷光瑞）、大谷光明（浄如）、大谷尊由、九条武子らがいる。

■経歴 一近代教団の基盤確立一

誕生・新々門跡 嘉永3年（1850）2月4日、本山永春館で誕生した。徳如新門（広如上人の猶子）の入寺後3年である。安政4年（1857）徳如新門の養子となって嫡子として継嗣と定められ、九条尚忠の猶子となった。安政7年（1860）得度、新々門跡と称した。即日、法眼・大僧都、文久3年（1863）大僧正に任じられた。明治元年（1868）徳如新門が43歳で示寂して新門跡となった。明治4年（1871）に広如上人が示寂し、満中陰ののち22歳で継職した。

政教分離 明治政府の廃仏毀釈・政祭一致の宗教政策に対し、政教分離を推し進めた。政府は各省の上位に神祇省を置き、仏教は民部省の所屬となったが、島地黙雷・大洲鉄然は寺院統轄官庁の設置を建議し、寺院寮が設置された。明治4年（1871）京都府による宗名「一向宗」の通達があり、東本願寺・仏光寺・専修寺・興正寺代表と宗名問題を協議した。明治5年（1872）真宗の公称許可を受け、一宗一管長制のもと、専修寺堯熙が真宗管長になった。同年教部省が設置された。明治7年（1874）太陽暦を採用した初めての御正忌報恩講が行われた。明治8年（1875）大教院が解散し、明治9年（1876）興正派が独立した。明治10年（1877）真宗五派に管長が置かれ、明如上人が本願寺派管長となった。

諸制度の整備 明治5年（1872）梅上沢融・島地黙雷を欧州視察、赤松連城らを英独へ留学させた。明治9年（1876）学制改革を発し、本山に大教校を地方に小教校を設立することとした。明治13年（1880）寺法を制定、翌14年宗会を開設するなどして、教団諸制度の近代化を進めた。明治14年（1881）西本願寺派を本願寺派と改称した《明教新誌》。明治19年（1886）護持会を設置して教学資金を充実させ、明治33年（1900）大日本仏教慈善会財団を興し社会救済事業にあたった《明如伝・内事旧記・宗会百年史・本山録事》。なお、明治9年（1876）本山

日報、明治23年(1890)本山月報、明治30年(1897)教海一瀾が創刊されている。宗門教育にも尽力し、北海道・鹿児島・沖縄やハワイ・北米開教を推進した。**諡号** 明治9年(1876)親鸞聖人の諡号「見真」を追贈、明治12年(1879)勅額「見真」を授与された。明治15年(1882)蓮如上人の諡号「慧燈」を追贈された。この頃、山科の蓮如上人廟は東西本願寺の共有となった。

文化 明如上人は有栖川熾仁親王、村山弘根、高崎御歌所長に和歌を習い、多数詠んだことで知られ、その和歌は鏡如上人が明如上人7回忌にあたって大口和歌所寄人に嘱して20000余首から選んだ『六華集』2巻に収められている。なお、明治4年(1871)本山書院で日本最初の博覧会が開催されている《京都博覧会史略》。

示寂 明治36年(1903)1月18日、54歳で示寂した。葬儀は、1月24日にカルカッタにいた鏡如上人より指示があり、3月16日鏡如上人が大谷に納骨した。

■ 聖教・史資料

蔵版 明治11年(1878)『真宗法要』を小本8冊として再版、同年『標註浄土三部経』を本願寺蔵版として刊行した《本山日報》。明治33年(1900)前田慧雲が『真宗法要拾遺』を刊行した。

関連史資料 明治33年(1900)是山恵覚が『本願寺歴代宗主伝』を著している。なお、明如上人の斡旋により、明治25年(1892)と明治37年(1904)の2回にわたって写字台文庫の大半(約3万冊)が仏教大学(現・龍谷大学)に寄贈されている。

著書 『仏会紀要』5巻(本願寺派本願寺執行所、1909)、『龍谷叢書』23冊がある。明如上人25回忌にあたって、昭和元年(1926)明如上人伝記編纂所が開設され、昭和2年(1927)『明如上人御消息集』・『明如上人伝』・『明如上人日記抄』が刊行された。『明如上人日記抄』は明治4年(1871)以来晩年にいたる日記である。

【参考文献】

『明如上人遺芳録』(国光社、1903)、『明如上人伝』(明如上人廿五回忌臨時法要事務所、1927)、『明如上人』(本派本願寺教務部、1927)、後藤了海『明如上人と津村別院』(津村別院、1933)、上田芳太郎『明如上人遺文抄』(本派本願寺、1935)、上田芳太郎『明如上人略年表』(真宗本願寺派護持会財団、1935)、丹波元『明如上人抄—西本願寺第二十一代門主—幕末明治期の仏教をすくった男・大谷光尊』(PHP研究所、2004)

第22代宗主 鏡如上人

明治9～昭和23年(1876-1948) 73歳

童名：峻麿、諱：光瑞、諡：信英院

■ 家族

明如上人の長男。母は円明院藤子(明治44年<1911>没)。明治31年(1898)九条籌子(九条道隆の子、光顔院如性)と結婚した。

■ 経歴 1 一本願寺の組織的強化—

誕生・海外視察 明治9年(1876)12月27日に誕生した。明治16年(1883)山科の学問所に移った。明治18年(1885)得度、法嗣として中国・ヨーロッパ諸国の宗教事情を視察した。明治24年(1891)頃から明如上人の病状が悪化し、門主代務や補佐の仕事をしていた。明治32年(1899)清国の視察に赴き、翌年からはインド仏跡巡拝ならびに欧州への外遊を行った。明治35年(1902)には大谷探検隊を組織し、自ら指揮を執って西域文化の重要な史跡を発掘して仏教関係

資料を収集した。島地黙雷らを海外視察に派遣し、宗教・教育事情を学ばせている。**継職** 明治36年(1903)1月外遊中であつたが、明如上人示寂の知らせを受けて、葬儀等の指示を出し、3月に帰国。28歳で本願寺住職、本願寺派管長となった。5月に本山・大谷本廟で初めて伝灯奉告法要を行い、門徒の参詣を促した。継職後は、宗政刷新、学事興隆、人材養成などに尽くした。仏教婦人会と仏教青年会が設立され、法式と僧階が改められた。明治40年(1907)大谷尊重(光明)を養子とし、明治43年(1910)嗣法選定式を行った。

宗祖650回忌 明治39年(1906)宗祖650回忌お待受の消息を披露し、準備事務局を開設した《教海一瀾》。明治40年(1907)大谷本廟の大修繕が行われた。明治43年(1910)本山両堂の修理が完了し、大遠忌を記念して書院にて法宝物の展覧が行われ、約30万人の拝観者が集まった。明治44年(1911)宗祖650回忌を2期に分けて勤修した。初めて全国から団体参拝を受け入れ、鉄道の「梅小路停車場」も建設された。法要総参拝者は100万人を超えたとされる。宗祖650回忌を記念して、龍谷大学に『仏教大辞彙』の編纂を命じた(大正8年<1919>完結)。

引退 明治41～42年(1908-09)にも探検隊を派遣し西域の調査を行わせた。それらの出費などから経済的問題が生じ、明治44年(1911)大谷家の負債が明らかとなった。その責を負って、大正3年(1914)5月14日本願寺住職、本願寺派管長を引退した。以後は上海や大連などを拠点に、アジア諸地域の産業の振興に尽力するとともに、仏教興隆のために人材育成や著述・出版活動に努めた。内閣参議、同顧問にも任ぜられた。

管長代理時代 鏡如上人の引退以降、六雄沢慶(1914-1917)、近松尊定(1917)、武田沢心(1917-1921)、大谷尊由(1921-27)の4人の管長が代理を勤めた。大正12年(1923)立教開宗700年慶讃法要を勤修し、以降毎年春の恒例となった。この年、本願寺蔵『教行信証』が複製され、また本願寺史編纂事業が開始された。**示寂** 終戦時は大連に滞在していたが、病気のため昭和22年(1947)に日本に帰国した。その後各地で入院、大分別府の末鉄輪別邸で療養し、同邸で示寂した。

■経歴2 一研究調査・海外事業一

鏡如上人の研究調査や海外事業等については、時期・内容が多岐に渡る。

二楽荘 明治40年(1907)から二楽荘を施工し、武庫中学並簡易科を設置、『二楽荘月報』、『仏教青年』(1913年刊)を発刊した。園芸試験場を併設した。大正元年(1912)橘瑞超は二楽荘より『諸訳浄土三部経』を刊行している。

農事開発 シンガポール・ジャワ島・上海・トルコ・台湾などアジア諸地域の農事開発にも従事した。海外別邸には無憂園(上海)、浴日荘(大連)、大谷邸(旅順)、耕雲山荘(セレベス島)、逍遙園(台湾高雄)がある。

支援団体 大正8年(1919)設立の光寿会は、研究・講演・出版に関する鏡如上人の支援団体で、大正11年(1922)に機関誌『大乘』を発行している。昭和5年(1930)設立の光瑞会は、俗諦門としての処世を学ぶもので、昭和12年(1937)設立の三夜倶楽部は時事問題や修身について鏡如上人を中心に座談していた。

西域探検 明治32年(1899)には清国を巡遊し、以後3年に渡って第1次印度欧州巡遊に赴いた。それ以降、3次に渡って西域を探検している。明治35年(1902)ロンドンからの帰りに西域を探検し、翌年帰国した。西域に留まった2名(堀賢雄・渡辺哲信)は明治37年(1904)に帰国した。第2次は明治41～42年(1908-09)

に行われ、橋瑞超・野村栄三郎が派遣された。第3次は明治43～44年(1910-11)に橋瑞超を派遣していたが、さらに吉川小一郎が派遣され、大正3年(1914)に帰国した。西域探検の将来品は大谷コレクションと呼ばれ、仏典・古典籍・仏像・壁画・刺繍・染織・古銭、その他古美術品、ミイラに至るまで様々なものが収集されている。将来品は、『西域考古図譜』2巻(1915年刊、690余点)、『新西域記』2巻(1937年、隊員の手記・日記・報告記録等)、『西域文化研究』6巻(1963年完結、龍谷大学西域文化研究会による組織的研究)等にまとめられている。

巡遊 明治39年(1906)南樺太、第2回清国、明治42年(1909)に第2回印度・欧州巡遊を行った。

■ 聖教・史資料

著書 仏教講演・時局講演などを集めた『大谷光瑞全集』全13巻(1935年完結)がある。仏教関連著作としては、『大無量寿経義疏』(二楽荘出版部、1914)、『維摩経講話』(大乘社、1934)、『見真大師』(1922)、『仏説阿弥陀経講話』(大乘社、1928)、『般若波羅密多心経講話』(大乘社、1926)、『妙法蓮華経講話』(大乘社東京支部、1931)、『仏教之要諦』(光明閣、1921)、『仏教の原理』(大乘社、1924)、『仏教の大意』(大乘社東京支部、1930)、『無量光如来安楽荘嚴経一梵語原本国訳』(光寿会、1929)などがある。その他、中国・台湾・インド・ヨーロッパなど国際情勢に関する著書が多数ある。

関連聖教 大正期には、『真宗全書』や『仏教大辞彙』などが刊行されている。大正2年(1913)『真宗全書』が、大正5年(1916)『真宗大系』が刊行開始され、江戸期を中心とする講録・註釈等が体系化して収録・翻刻された。大正3年(1914)『仏教大辞彙』が刊行開始、大正8年(1919)に完結した。宗典については、大正5年(1916)『本派本願寺真宗写真宝典』が刊行されている。親鸞聖人真蹟本等の影印・複製本も刊行され、大正11年(1922)立教開宗700年を記念して坂東本や西本願寺本『教行信証』の複製本、大正14年(1925)親鸞聖人加点点『浄土論註』の複製本が公刊された。書誌学的研究も進展し、大正9年(1920)辻善之助が『親鸞聖人筆跡之研究』を発表、大正10年(1921)鷲尾教導が恵信尼文書を公表した。仏典の英訳事業も始められ、大正12年(1923)龍谷大学内に仏書翻訳会が成立、大正13年(1924)英訳『阿弥陀経』完成、昭和元年(1926)中井玄道が『歎異抄』英訳を出版した。

【参考文献】

広田四郎『法主大谷光瑞上人伝』(国見館、1910)、『鏡如上人芳躅』(本派本願寺、1964)、『鏡如上人年譜』(本派本願寺、1954)、徳富蘇峰『大谷光瑞師の生涯』(大谷光瑞猊下記念会、1956)、杉森久英『大谷光瑞』(中央公論社、1975)、岡西為人『大谷光瑞師著作総覧』(瑞文会、1964)、津本陽『大谷光瑞の生涯』(角川書店、1999)、廣瀬覚『大谷光瑞と現代日本』(文芸社、2001)、白須浄真『大谷光瑞と国際政治社会—チベット、探検隊、辛亥革命』(勉誠出版、2011)、柴田幹夫『大谷光瑞の研究—アジア広域における諸活動』(勉誠出版、2014)

第23代宗主 勝如上人

明治44～平成14年（1911-2002）91歳

童名：照、法諱：光照。院号：信誓院。

■ 家族

明如上人の3男である大谷光明（浄如）の長男。母は紅子（九条道隆の子）。昭和12年（1937）徳大寺嬉子（光慧院浄恵）と結婚した（平成12年〈2002〉示寂）。子に篤子、紀美子、即如前門（大谷光真）、登代子がいる。

■ 経歴 一戦時体制と戦後の諸改革一

誕生・継職 明治44年（1911）11月1日に誕生した。大正3年（1914）法孫と決定した。鏡如上人退任時は4歳であり、管長代理が4代続いた。昭和2年（1927）10月16日付で得度、20日付で本願寺住職、21日付で本願寺派管長に就任し、22日に法統継承の直諭を示した。未成年のため、保摂会（会長：大谷光明）を置き、職務の補佐を受けた。昭和6年（1931）成年奉告法要を機に保摂会は解散した。昭和7年（1932）伝灯奉告法要を予定していたが、2度延期され、昭和8年（1933）伝灯奉告法要を修行した。80団体15万人が参詣、出勤僧侶は2500人であった。継職後まもなく戦時下に入った。昭和10年（1935）東京帝国大学文学部を卒業した。昭和16年（1941）宗制寺法にかわって新たな宗制が施行され、いわゆる「戦時教学」が推進された。

戦後の制度改革 戦後は、新しい法規の制定と制度の改革に着手した。昭和22年（1947）に教区・組巡教を開始し、昭和42年（1967）までに完了、それ以降は寺院への巡教を開始した。海外巡教として、北米・カナダ・ハワイ・南米の開教区やヨーロッパ・台湾などへもたびたび出向している。昭和33年（1958）「浄土真宗の生活信条」を發布し、昭和42年（1967）「浄土真宗の教章」を制定した。宗派外では、昭和44年（1969）には全日本仏教会会長を務めた。その他、全国教誨師連盟総裁、日本仏教保育協会名誉会長などを歴任している。昭和50年（1975）には世界宗教者頂上会議で仏教代表として国連で演説し、平和推進活動などに尽力した。

遠忌・大遠忌 昭和23年（1948）蓮如上人450回遠忌法要を勤修した。昭和36年（1961）親鸞聖人700回大遠忌法要を2期にわたって勤修した。法要前には諸堂の整備が行われ、法物の展覧は全国8会場及び本願寺において実施された。法要総参拝者は100万人を超えたとされる。昭和48年（1973）親鸞聖人ご誕生800年・立教開宗750年慶讃法要を勤修した。

退位 昭和51年（1976）御正忌報恩講御満座後に門主退位を表明した。昭和52年（1977）本願寺派門主、本願寺住職を引退し、後を即如前門に譲った。その後は前門として、日本国内はもとより海外にも精力的に出向し、伝道教化の活動に尽力した。同年には英国浄土真宗協会名誉総裁に就任している。

示寂 平成14年（2002）6月14日、90歳で示寂した。8月1日に納骨された。

■ 聖教・史資料

昭和8年（1933）『正信偈和讃』改譜を刊行した。親鸞聖人700回大遠忌を記念して、昭和31年（1956）聖典意識編纂所、本願寺史料編纂所を開設した。昭和29年（1958）『聖典意識浄土三部経』、昭和36年（1961）『聖典意識教行信証』、昭和39年（1964）『聖典意識七祖聖教』が刊行された。昭和42年（1967）本願寺蔵版『教行信証』

を改版した。昭和44年(1969)『本願寺史』全3巻の刊行が完結した。また宗祖700回忌を記念して、「鏡御影」修復が行われた。

関連聖教 真宗関連の聖教として、昭和2年(1927)『真宗叢書』、昭和4年(1929)高田派『尊号真像銘文』影印、昭和16年(1941)『真宗聖教全書』が刊行された。昭和31年(1956)親鸞聖人700回大遠忌を記念して『真宗聖典』が刊行された。

著書 『唐代の仏教儀礼』(有光社、1937)、『教えを仰ぐ』(百華苑、1952)、『法縁 海外巡教写真紀行』(本派本願寺、1959)、『仏の心と人の心』(日本仏教徒懇話会、1983)、『法縁(勝如上人ご巡教記録)』(本願寺出版社、2001)、『『法縁』抄—勝如上人の九十年』(本願寺出版社、2002)がある。なお、勝如上人の基金による収集資料および切手コレクションが龍谷大学・写字台文庫に蔵されている。

【参考文献】

『勝如上人年譜』(浄土真宗本願寺派勝如上人年譜編纂発行委員会、2009)

第24代宗主 即如前門

昭和20年～(1945)

幼名：真、法諱：光真。

■ **家族**

勝如上人の長男で母は嬉子。昭和49年(1974)田中範子前裏方と結婚した。子に専如門主(大谷光淳)、弘、真利子、真喜子がいる。

■ **経歴** 一戦後から現代へ

誕生・継職 昭和20年(1945)8月12日に誕生。昭和35年(1960)に得度した。昭和42年(1967)東京大学文学部を卒業した。昭和45年(1970)新門となり、新門就任式、新門就任奉告法要を行った。昭和46年(1971)龍谷大学大学院修士課程、昭和49年(1974)東京大学大学院修士課程を修了した。昭和52年(1977)法統を継承し、本願寺住職、門主に就任。昭和55年(1980)4月から10月にかけて伝灯奉告法要(62日間62座、参拝者28万人)を修行し、「教書」を發布した。翌昭和56年(1981)から平成17年(2005)にかけて、日本国内の全ての組を巡教し、北米・カナダ・ハワイ・ヨーロッパなど、海外開教区へも度々巡教している。

教化と諸制度 平成20年(2008)立教開宗記念法要のご親教で「浄土真宗の教章(私の歩む道)」を新たに制定している。宗門では、平成19～24年(2007-2012)にかけて、宗制・宗法・本山典令などの基本法規の改正や整備などが実施された。派外においては、全日本仏教会会長を3度務めた。その他、全国教誨師連盟総裁、日本国際連合協会京都本部本部長などを歴任している。なお、平成6年(1994)には本願寺境内が世界文化遺産に登録されている。

遠忌・大遠忌 昭和60年(1985)本願寺本堂昭和御修復完成奉告法要、平成3年(1991)本願寺第11代顕如宗主400回忌法要・寺基京都移転400年記念法要、平成10年(1998)蓮如上人500回遠忌法要が行われた。蓮如上人500回遠忌法要では、東西合同特別展覧会「蓮如と本願寺」などが開催された。顕如・蓮如両上人の法要を記念して、『図録顕如上人余芳』・『図録蓮如上人余芳』(本願寺史料研究所編纂)など各種記念出版物が刊行されている。平成17年(2005)「親鸞聖人七五〇回大遠忌についてのご消息」が發布され、平成21年(2009)には、平成11年(1999)に起工した御影堂の平成大修復が完成した。御影堂平成大修復事業

を記念して、「西本願寺展」（東京国立博物館、2003年）が開催されている。平成23～24年（2011-12）親鸞聖人750回大遠忌法要が修された。「世の中安穩なれ」をスローガンに100座の法要が勤められ、約46万人が参詣した。「宗祖讃仰作法」・「宗祖讃仰作法 音楽法要」が制定され、法要で修された。法要にあたっては、「本願寺展」（広島県立美術館・徳島市立徳島城博物館・名古屋市博物館・石川県立歴史博物館・北海道立近代美術館・九州国立博物館、2007-09年）、真宗教団連合・浄土宗会協力による「法然と親鸞一ゆかりの名宝」（東京国立博物館、2011年）や真宗教団連合「親鸞展—生涯とゆかりの名宝」（京都市美術館、2011年）などの特別展覧会が行われ、『図録親鸞聖人余芳』（本願寺史料研究所編纂）など各種記念出版物が刊行されている。

退任 平成25年（2011）4月15日立教開宗記念法要（春の法要）にて門主退任を表明。平成26年（2014）6月5日に門主を退任し、前門となった。翌6日、法統継承式が行われ、第25代専如門主が法統を継承した。

■ 聖教・史資料

聖典編纂事業 昭和53年（1978）英文真宗聖典翻訳出版事業、昭和57年（1982）浄土真宗聖典編纂事業が開始された。これまでに、『浄土真宗聖典』（昭和60年〈1985〉原典版、昭和63年〈1988〉註釈版、平成16年〈2004〉註釈版第二版、平成17年〈2005〉註釈版第二版分冊）、『浄土真宗聖典七祖篇』（平成4年〈1992〉原典版、平成8年〈1996〉註釈版）、『浄土真宗聖典現代語版』（平成8年〈1996〉浄土三部経、平成10年〈1998〉歎異抄、平成11年〈1999〉蓮如上人御一代記開書、平成12年〈2000〉顕浄土真実教行証文類、平成13年〈2001〉一念多念証文、平成15年〈2003〉唯信鈔文書、平成16年〈2004〉尊号真像銘文、平成17年〈2005〉三経往生文類・如来二種回向文・弥陀如来名号徳、平成19年（2007）親鸞聖人御消息、平成21年〈2009〉浄土文類聚鈔）、『浄土真宗聖典全書』（平成23年〈2011〉第2巻「宗祖篇上」、平成25年〈2013〉第1巻「三経七祖篇」、平成26年〈2014〉第5巻「相伝篇下」）、『浄土真宗辞典』（平成25年〈2013〉）などが刊行されている。また、本願寺蔵版に『御文章』（五帖、昭和52年〈1977〉開版本）、『教行信証』（昭和55年〈1980〉改版本）、『浄土三部経』（平成12年〈2000〉再治本）がある。平成23～24年（2011-12）親鸞聖人750回大遠忌法要を記念して、西本願寺本『教行信証』の復刻本と写真版である『本願寺蔵 顕浄土真実教行証文類 復刻』（浄土真宗本願寺派総合研究所、2011）及び『本願寺蔵 顕浄土真実教行証文類 縮刷本』上・下（『教行信証の研究』第3・4巻所収、浄土真宗本願寺派総合研究所、2012）が刊行されている。

著書 『こころの対話—大谷光真門主と各界の17人』（西本願寺出版部、1980）、『願いに応える人生』（本願寺出版社、1983）、『仏典講座2 浄土論註』（大蔵出版、1987、共著）、『さとりと信心—門主法話集』（本願寺出版社、1993）、『朝には紅顔ありて』（角川書店、2003）、『世のなか安穩なれ—現代社会と仏教』（中央公論新社、2007）、『愚の力』（文藝春秋、2009）、『今、ここに生きる仏教』（平凡社、2010、共著）、『願いの力』（本願寺出版社、2011）、『浄土真宗のこれから』（築地本願寺、2013、共著）、『いまを生かされて』（文藝春秋、2014）、『人生は価値ある一瞬』（PHP研究所、2015）など多数ある。

【参考文献】

『本願寺写真帖—第24代即如門主伝灯奉告法要参拝記念グラフ』（本願寺伝灯奉告法要事務所参拝局団参部、1980）、『第二十四代即如門主伝灯奉告法要法縁録』（浄土真宗本願寺派出版部、1982）、『鏡如上人五十回忌法要—即如門主御親修』（本願寺別府別院、1997）

第25代宗主 専如門主

昭和52年～（1977-）

幼名：淳、法諱：光淳。

■ 家族

即如前門の長男で、母は範子前裏方。平成18年（2006）古川流豆美裏方と結婚。平成23年（2011）長男敬、平成27年（2015）長女顕子が誕生した。

■ 経歴

誕生から築地本願寺副住職 昭和52年（1977）誕生。平成4年（1992）得度、法諱を光淳、法号を専如と称した。本願寺新門・浄土真宗本願寺派新門に就任し、平成5年（1993）光淳新門立嗣奉告法要が行われた。平成12年（2000）法政大学法学部を卒業した。平成14年（2002）龍谷大学大学院修士課程修了、平成17年（2005）龍谷大学大学院博士後期課程単位取得退学した。平成20年（2008）築地本願寺副住職に就任、同寺で修される法要の導師を勤めるほか、首都圏での伝道教化活動に力を注いだ。

継職 平成25年（2013）即如前門が退任を表明し、翌年門主となることが決定。同年、築地本願寺副住職を退任している。平成26年（2014）6月5日、即如前門が退任、翌6日、法統継承式が行われ第25代門主となった。平成27年（2015）本山の御正忌報恩講ご満座後、「伝灯奉告法要についての消息」が発表された。平成28年（2016）10月から平成29年（2017）5月にかけて、伝灯奉告法要（全10期、80日80座）が修行される。また、宗門では平成35年（2023）に親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年を迎える。

その他 平成22年（2010）公益財団法人ボーイスカウト日本連盟特別顧問に就任した。平成28年（2016）世界経済フォーラムのヤンググローバルリーダー2016に選ばれている。また、中央仏教学院、東京仏教学院、龍谷大学大学院実践真宗学研究科などで講師を歴任している。

■ 聖教・史資料

聖典編纂事業 引き続き浄土真宗聖典編纂事業が行われている。平成28年（2016）『浄土真宗聖典全書』第4巻「相伝篇上」、『浄土真宗聖典 三帖和讃（現代語版）』が刊行された。『浄土真宗聖典全書』については、平成28（2016）年度に第3巻「宗祖篇下」、平成30（2018）年度に第6巻「補遺篇」の刊行を予定している。

著書 『浄土真宗のこれから』（築地本願寺、2013、共著）、『ありのままに、ひたむきに～不安な今を生きる』（PHP研究所、2016）がある。

【キーワード】

本願寺、歴代宗主、事績、聖教